

紀伊國名所圖會

三編
 一之卷
 那賀郡

ル 4
 325
 11

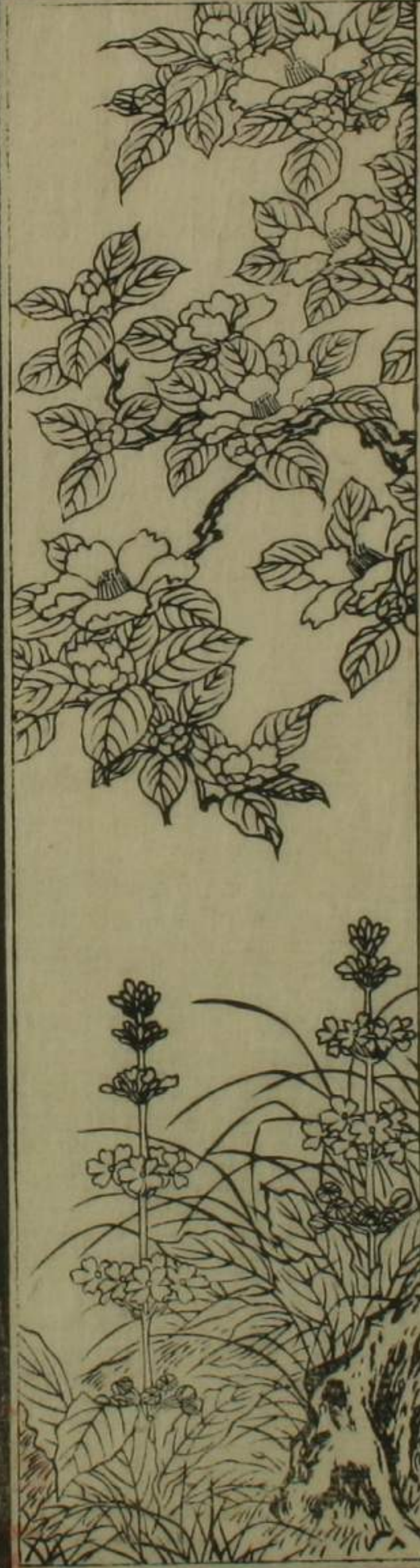


門 4
325
卷 //

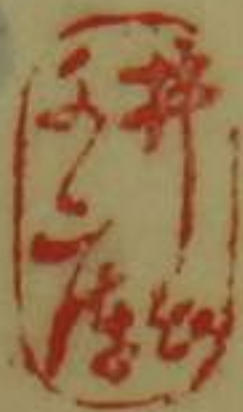
那賀伊都勝區
高野山靈蹤

紀伊國名所圖會

三集
七冊



すしれあふをりんくわいしん
をきりあふい識者の志しし
志りせせふれにれんいし
とんあふれに紀州名所圖
會ししし青霞堂のあまれ



此あゝらきき一巻若干ありて
世小古の事は成を又二日
加納氏其抄を集成し次丁
世より先母と予より一
越乞小予札とて紀伊國

席一

名よりおん所からとて少くもあ
と此あゝのれは萬葉の事し
らぬ関守のゆりか弓か
風とあゝ只の事は乃に急誰の
名も同くしる事ありし事と

高野のくあふに
と汲坐

高野のくあふに
高野のくあふに

高野のくあふに
高野のくあふに

高野のくあふに
高野のくあふに

高野のくあふに
高野のくあふに

高野のくあふに
高野のくあふに

高野のくあふに
高野のくあふに

高野のくあふに
高野のくあふに

高野のくあふに
高野のくあふに

きんがさうさうのち業あういぬ
 こころいれさうの架よ一古を
 さいはまねるこころ

天保八年正月

右大納言菅原孫次



兼和十二年解所押
紀伊國那賀郡印

仁壽四年解所押紀伊國印
同解所押紀伊國伊都郡印

菅原孫次

伊都郡



公
本



新敷 岩の手大宮

新敷
又ぬひと
いなかのむ
はらけの
いなかの里の
いなかのむら

三ノ

六ヶ井

山手

紀三編
二

岩手大宮

岩手大宮村の岩手大宮
氏神あり境内廣く社を樹す

本社左三部大権現右熱田大明神

例祭 六月七日九月十六日
十一月は火燒祭

あやあり又八月晦日乃兼五部一齊新し神事あり其式は神一人神宮一人
本海つひく大権現と社を樹す二部小並びて祭を奉る左右
小はれく上は下井浦村は其乃後同村の一本松といふ一各を神をこし
社を樹す勝平くは渡河のる隣傍の民戸小並びて祭を奉る
とては必靈驗ありとて社下及近々の編素屋集りて社を樹す
本社の左より ○鳥居一基 ○拜殿 ○神樂所 并 御供所 本社の右
六神合祀と ○本地堂 本社の左より 鐘樓 本社の右
御供所 本社の右 玉塚 本社の右 御供所の玉をこし塚に
御ひ依て

社傳云熱田大明神は日本武尊を尾張國より勅請し上

古は社地の東熱田森に坐しは成中古以降此地に遷坐

し遷す 其舊地今も御あり清原附神と稱し神を奉祀あるが本世俗

里神とも稱して崇敬はといふ三部大権現は眞教大師上人高

野山に在し時宗教を弘めむが為小傳法院建立の志願と

紀して西國小趣くむして城洲伏見の指荷社に詣でる

く遠行を止め早く紀州に歸る紀州を少く必

求むるを得しとの神託ありしを尋ねて紀州を

るに果して岩手社の寶券をばりて是れとも還る

を捨るしは使ししを中路より歸りて東寺の門に

榜して券を城募りし小経を券を募りて是れとも

券を還りしとも感歎して文を遂に岩手社と上人

に寄附しし志願を賜けむして清く下司職をか

つる 法網集元亨抄書少は事あんさう同集和歌と按むる券主を簡を

山正學房上人覺鏡傳法供料乃至代可勤かて大治元

年根来山に伽藍を創せんして先當社と建て六十餘坐れ

神と勅請して根来寺の鎮護とをり然るに豊後國南証乃

兵燹にても社殿の社殿及金剛童子堂龍所室藏寄附状

記録等悉灰燼となりて春秋此一夢とありぬと昌平の
市代と遇て再建造營一寛文九年に境内殺生禁札を給
つて日小そそりて貴後信仰浅く大社の形や備せり

六箇堰 堰は浦前村の親岸より北川を堰て數百石の田畠を儲け此堰は意
月宮井を儲け今の堰は改む此地下當石一破後をりて天保六年十
月宮井を儲け今の堰は改む此地下當石一破後をりて天保六年十
月宮井を儲け今の堰は改む此地下當石一破後をりて天保六年十
月宮井を儲け今の堰は改む此地下當石一破後をりて天保六年十

天龍山寶珠院圓伽井寺 同村より
真言新義 本尊阿彌陀佛
寺尺八寸の立像小
て聖徳太子此作

當寺乃縁起より今むく弘法大師勤操僧都小從
ひく取開持の法を傳へ此地におつて修行したる時
靈杖を以て自開伽井を穿ら終り尚寺に即大師修法の
急地にして此里の名を清水と名づる多も急地開
伽井乃清水に由来りか此靈水をれを根来山聖堂の

以一山の法用れあ皆此井より汲みて日々にこびりと
ついで傳へ其井今も村中よりして水清冷潔白くして寒暑
小も増減をれり又回園中より此寺石より勤操石
と号く是則傍乃急地にして種々の傳説ありとより其
側小享保年中日州の沙門法印憲勝一小碑を建てり

銘云 大師一穿 經九百年
歡喜池水 惟茲井泉

密教山觀音院總堂寺 同村より真言宗新派今大ニ廢を奉尊十一面
親音本像にして古色あり境内小古碑一基あり天文
六年十月廿八日刻し當寺に無教大師の草創して

岩手里 八雲寺抄云根来園を教撫名所集藤塩草と
幸國乃名所といひ岩手庄中をりやうへ

新續古今 夫木
此岩手の里にやまをこれ候よりやまを和らん
されぬと岩手の里のいももなまをまゝ白上梅夜
こそとまはばりて又も候はらうとて此里の山吹のくれ
從三位爲子 後一條院御製 左近中將具氏

山吹のついでに里のまうやにがー及乃れ小々ん 隆 信

思ふもひる世もあつてむもはれ里のついでやま 雅 有

とるれらあまふと山吹のついでに里のまやけら舞 前中納言具氏

よとらとともいそでれ里の名とれいんせり山吹の次 権大納言爲尹

里れ名いそでもあつてはれのまふと山吹のま 爲 教

岩手驛

岩山より四里尚沢より名々三里元和年中傳馬所より村中一軒子の

庖瘡神祠

備前村より古俗曰某年正月廿二日の老婆あり此村乃大西氏小妻

古市辻

岩手村領より四辻の交をい此地乃岩手郡金屋より河津郡乃り根

船津社

船津社より八幡大神 末社 大將軍

古老傳云

古老傳云當社八幡大神の神像鎌倉より流きて来て此地尔

安樂寺

同村より 本尊十一面觀音 鎮守 白山権現

二乗山

二乗山小傳法院大日寺 本尊大日如來像 鎮守

石塔

寺の西にあり 長五尺 廟 寺の南にあり

春日明神社

寺の東にあり 何瀬

寺傳云

肥前國府知津庄總追捕使伊佐平次龜元の妻橘氏ハ

覺鑿上人

乃母なり上人一度家を出て諸國を經歷し湯と

高野山

に留免後根来城創造次とて母堂此寺を慕い

遙々當國

小妻れども根来ハ女人結界の地尔して上人乃茲

とらりたる一巻ハ回廊舞臺龍堂宝藏御供所ホ備り
社領も若干ありとて

室に入らざれば上人と相つら此小庵を結んで母老を侍
せ村中れ意家六人よ命とてこれ亦仕へしめ給ひ園寂乃後
之地を淨刹とて廟を建て増成す六人を度し僧と
かし永く香花を供め給ひしより堂宇是成甚く
天山乃兵燹に悉烟の末に遺る今い路乃かみを
たり

蟹谷山齋院西方寺

同村山麓にあり真言宗に属し修りて授優婆塞
名草郡出水村の齋院西方寺を云々再建は近年
又修築して堂舎壯麗なりて中類あり

什物

又信紳家乃に書画を
類あり

孝子勘口郎

南海遺稿云
勘口郎者那賀郡宮村民也黽齡喪父事母至孝貧無田宅寓
居里中一廬賞距廬六里餘僕役村家晝以服役夜輒挾家省
母如此十餘年無敢懈日年過四十還家娶婦生一男居二年
窮益甚迺與其婦謀相列縲居奉母母既老且盲躬亦患聾時
傭作以爲活雇主每爲設食輒受而不食必盛之一器持歸以

雙を養ふ
國中孝子多し一併小南紀
忠孝傳小るる今畧し

饋母而後始餐凡其在膝下多方承順莫不歡
其窮相告以賑濟郡縣具狀以聞公府命有司
歲賜米四石并命巨璫錄其事以表章嗚呼夫
不識丁之卹此可謂慈愛忘勞者矣孔子所謂
秋其艱如此其勤可謂慈愛忘勞者矣孔子所謂
庶矣哉世之士君子學術有餘安居飽暖不顧
亦何如哉勤四郎年已五十有八子曰才次郎年
年八十歲今年實享保十年也云
祇園源瑜撰

白山妙理大権現

小大池村にあり

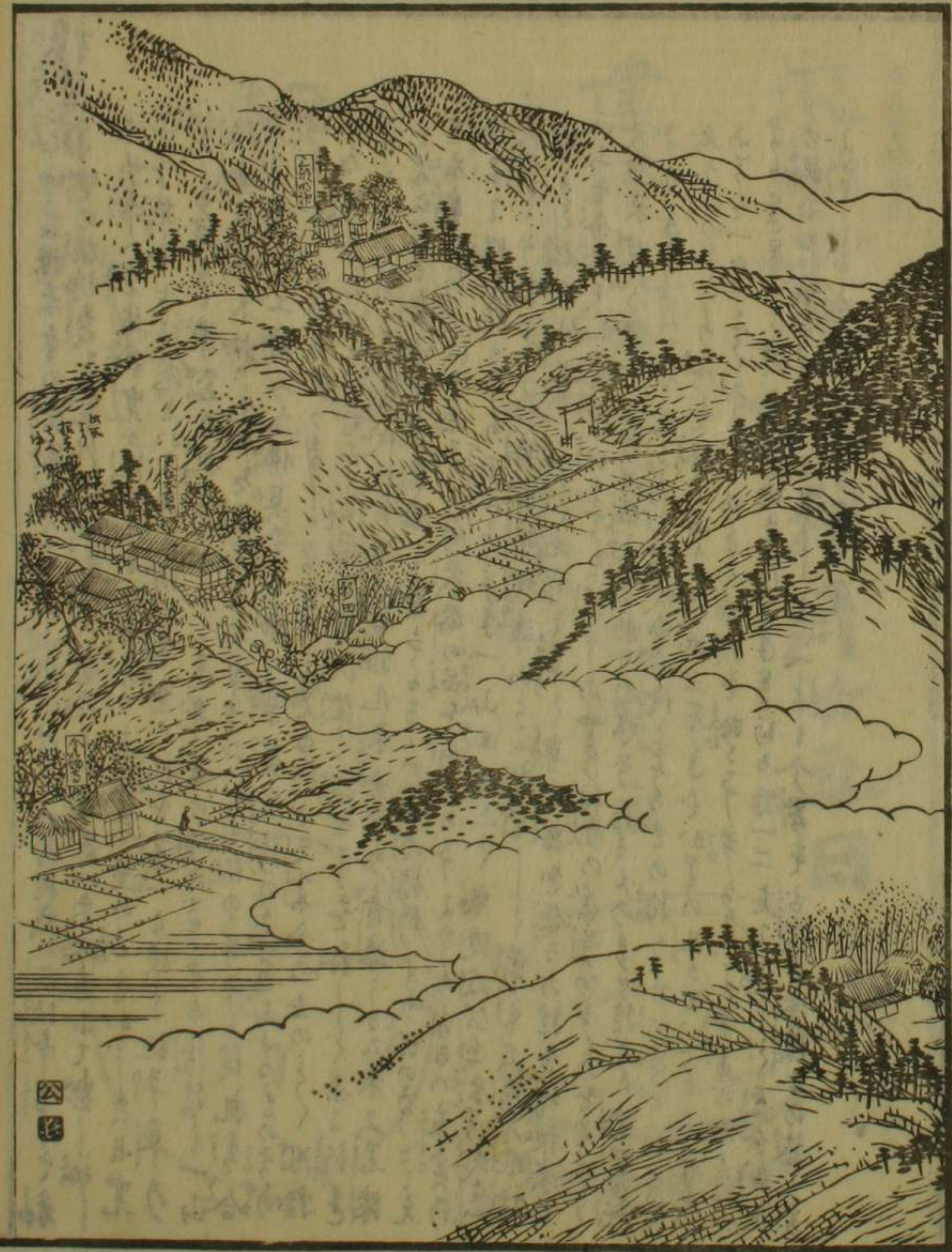
○末社九祠 ○古碑一基 正平十四年十一月八日

傳云長承二年覺鑲上人就前園白山権現を勧誘し社領
を寄附し社殿壯麗なるを根来寺ともいふ
祭礼の意殿今も根来山中祈りにありて古のさむ想像
とすべし

東坂本村

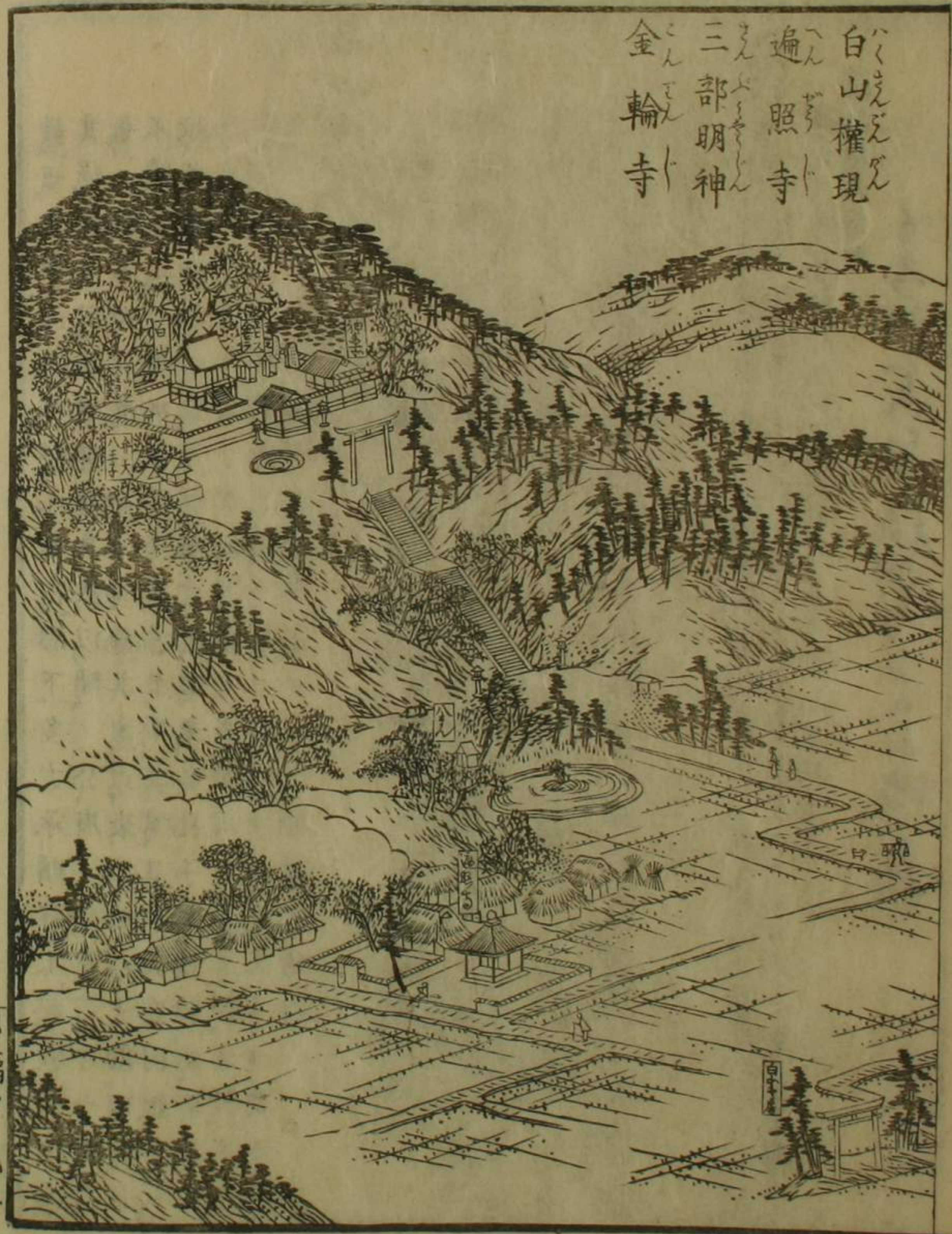
根来山の東北坂なりて西國順礼の御堂多し
御堂あり天文二年とあり其地根来山中ふた碑あり

うらひをのく孫ざらるる山路なり






白山権現
 遍照寺
 三部明神
 金輪寺



絶三編
 一ノ九

根来梳

根来寺の製器なり。時山内の院々又尚村或ハ西坂幸留して制
 室の振振を製し根来室ハ覺後上人孫基ハ来此を以て製し
 也。其時人室術長寛弘にせるものを乞ふる。其根来室の古さかざり。其
 二年施主古河丸と云はし。其河丸朱塗の机を第一と云ふ。其机平卓の
 や。其机も佛具の机なるべし。是并基の項のり。其机を第一と云ふ。其
 漆塗を専ら佛具の机を夫。其二百年を其室のり。其机を第一と云ふ。其
 天目蓋木工梳み。佛具なり。余を某器。其のり。其机を第一と云ふ。其
 何れ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 のを并。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 めり。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 も。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 て。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 佛具。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 洗。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 室。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 い。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 又根来時代の佛具。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 り。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 名。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 お。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 り。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 の。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其
 よ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其机を第一と云ふ。其

紀三編フ

京大倉好齋藏

永和三年丁卯月廿五日

永和年号ハカク如キ
 器ノ底ニ書ケリ

建徳元年十月西院住

建徳年号 在若山安田長穂藏器之底

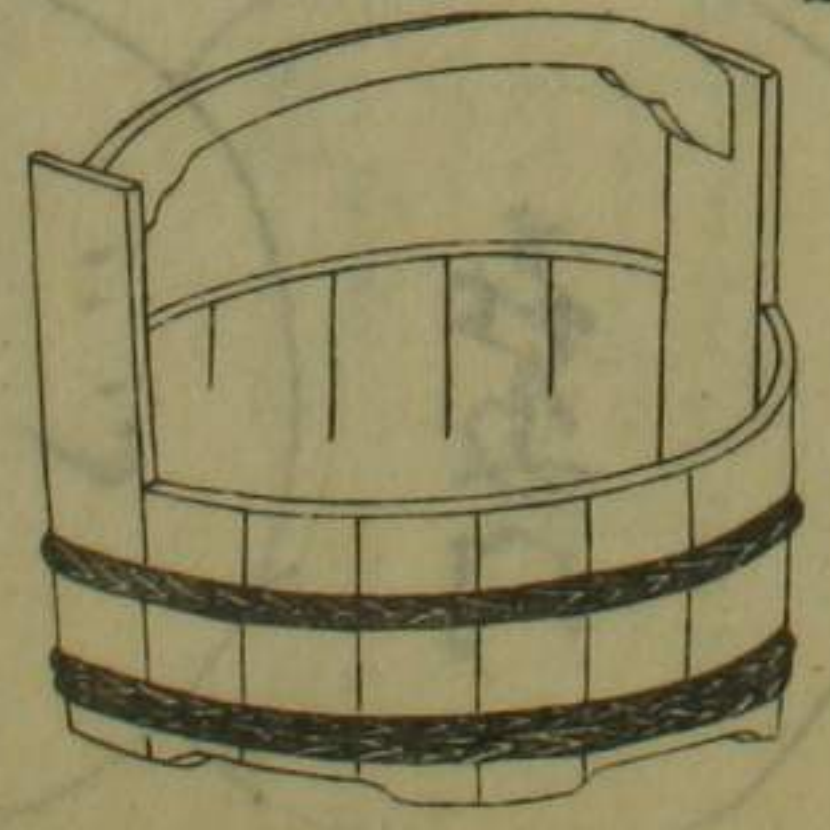
大倉好齋藏
 永和三年十月廿五日



明徳年号書
 此器二回り書ニセリ



安田長穂藏



チャツノウラ

以下並安田長穂藏

竹殿

百花口

以下三

豆子ニカキタリ

花嚴院

六福藏院

不動尊前

正月吉日

長安門

シル梳ノゴトキ
モクウニアリ

永和三年

不動銘三方ノ如キ
モクウニアリ

根来周 又根来小多ノ古抄あり

左甚五郎 或書云甚八紀州根来赤坂寺ノ産アリ根来近左ノ甚五郎

紀三編一千下

土佛 同村の小尊像中ニあり味中ニ二十丁山中加持水より早懸小も個どむ師の内れ名ノて天正乃能下伏入に逃去彼地あり多クハ一伏入の産

○産物畑牛房 地ノ牛房糞にして糞を畑に用ひて糞畑牛房と云ふ其糞畑を糞畑牛房と云ふ此地層

鴛鴦川 東坂幸れ小川ありて其源同ノ川あり其源を鴛鴦川と云ふ此地層

堀川百首

其成るも其波ある山川は流るるを此すごめり 仲 實
と名此なる岩根のうら水けさよと毛いもあかむ 俊 頼

○古碑二基 同所不動尊ノ例ニあり

銘 建徳二年霜月廿四日 大願王庭堅

意者翁墓 押川村西山林中にあり

翁ハ勢州度會郡惟柄庄東宮村の人少して姓ハ千葉より代

東宮村より移る小東宮氏といふ歎学成りて駿河藩に奉仕

元和以後此地を采邑賜る爲此地の勝景を賞し之致仕乃後小庵を卜築して花をみづらにん紙を巻て老を去り且遺玄しく死後此処に墳墓と築くむ其祥世の歎とて

妻の花秋れをみづら乃りしをも又もつる妻のつれ山風

白鬚堂

押川村の東今細村に六右馬のといふ者あり白鬚堂といふ元祖は依り本ら御親親より法代を山守神宮に傳へ曾孫を志門長真といふ始てあり御親親の紀る所として昔近江國より勅傳し某天皇より賜る旗及陣具を御親親より其家延元元年の勅書に建武の御書に三十三通を藏せり元禄年中中興失して今八右衛門尉より元弘建武の文書に八村名を草烟とて永徳の文書に今細と記せり其一二を左よかり

新田義貞以下凶徒誅伐之事所被下將軍家之御教書也於于御方致軍忠者可引恩賞之状如件

建武三年十月十七日

源國清 判

茅畑村白鬚一黨等致軍忠上者於更後諸方之給至公事等悉可停止者也依將軍家仰執達如件

紀三編一ノ十二

元弘三年八月十八日

左少將 判

塔乃芝

岩手縣をたつて長方十丁許西園分村あり

田畠の間は左より方一丁許乃芝生なりつり勝地を簡定して建る所の園分金光明寺此廢跡なり今八弥勒堂大門鎮守拜殿等乃此の礎小沙土中はを大塔の礎石依然としてつ梵唄響絶く牧笛を起る名古の悲系流ぐり次此あつりに布目つる瓦砾乃名札を侍を足て當時を想像

延喜主税式云

國分寺領二萬束

三代實錄云

元慶三年二月廿二日壬午紀伊國金剛明寺火堂塔坊舍

悉成灰燼

園分今別明寺ありあれあつりつり成とて
去るればいづるははる所とつてとつりけの事もさる首麻呂

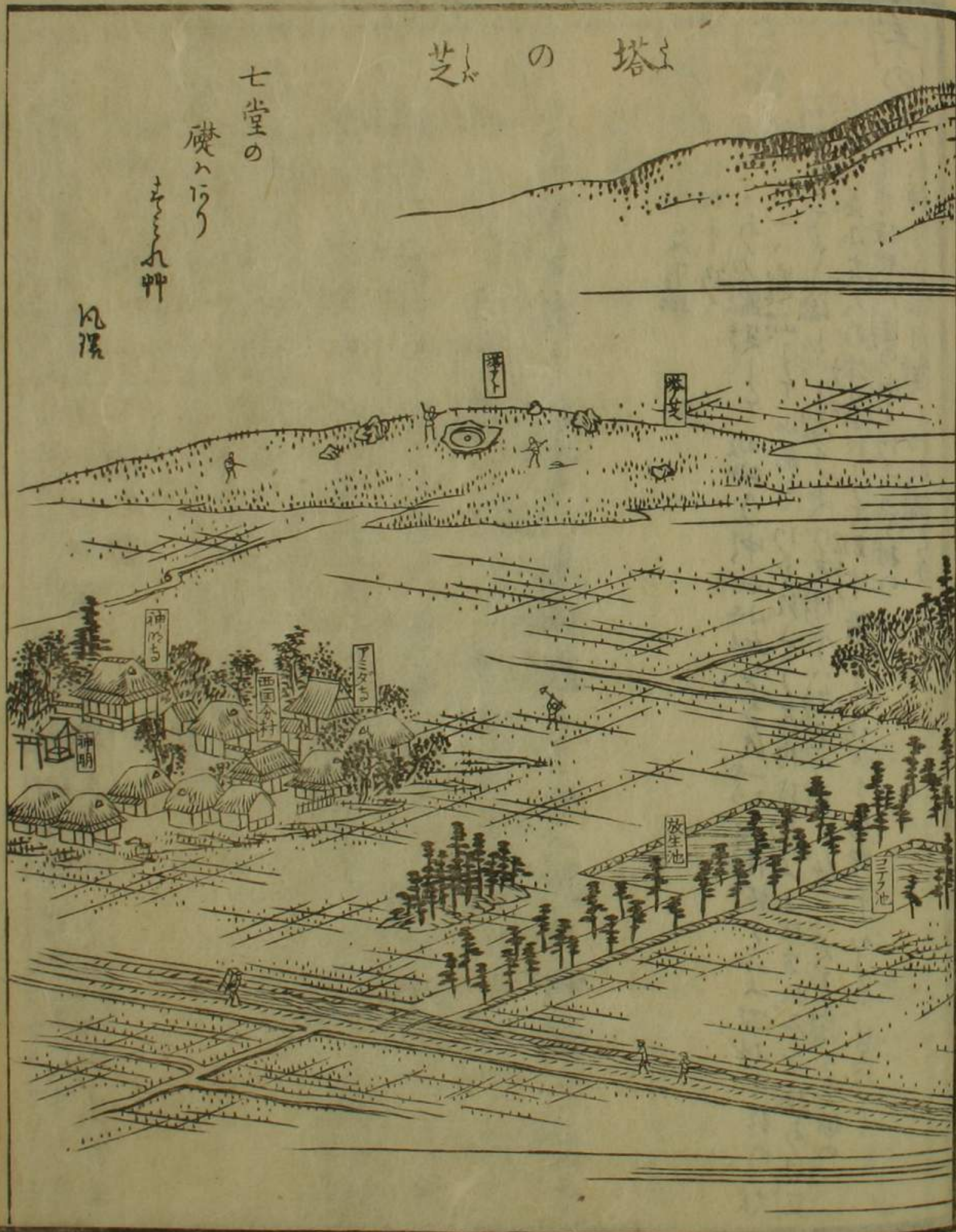
芝の塔

七堂の

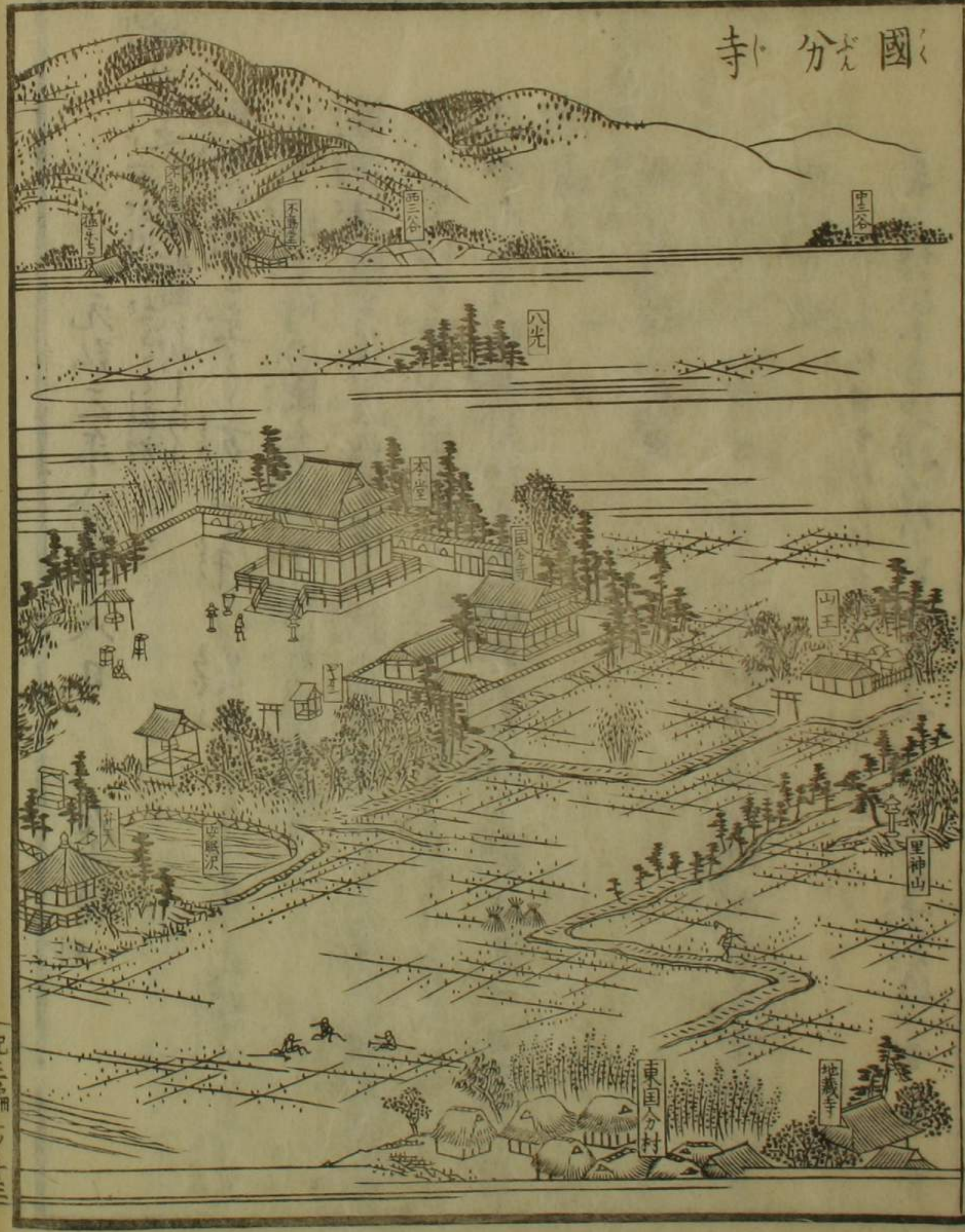
礎のりり

まきしん

風



國分寺



日置毘登弟弓故居 其地洋方伊國那賀郡大領外正六位上日置毘

登弟弓一萬束獻於當國分寺授從五位下

春日川 源八池田庄春日池より出づ南に流る

八光山醫王院國分寺 東國分村より真言宗

當寺天平年中廿草創小して國分僧寺に相對し法華滅
罪寺と号して巍然多於靈區に中世棟宇大に傾
圯し多くは星霜を経り慶長年中去人等高僧を請
て其廢を興し殿堂門廡煥然として一新以寺領を若干

製邊坂 田中庄下村

二塚 同村あり一ハ芝山にて水面をうづめ其内茂く石を積り巨

羊の宮 中井坂村邊の山あり六ヶ村の氏仲りり境内廣くは取備あり

田中庄中に意社八祠あり流り田中八社を稱次當社も

其一ありて末の月日守護神を坐せば正月九月末の日を祭

日々毎月末乃日小御供を備ふ 神主を石井

若宮八幡宮 尾等村邊の傍あり六ヶ村乃氏神田中八社の一なり鎮坐の

壯麗にして祭祀も多し神主社人等も

倉谷川 海上川より源八幡山に佛跡あり

源八幡山觀音院常樂寺 長一丈八分敷敷丈

妙見社 同村あり三丁坤あり大塚の虎形を備へ

鞍懸松 同村あり三丁坤あり大塚の虎形を備へ

山王権現 同村あり十二ヶ村の

例祭 四月六日 別當山王寺 別次真言宗

鳥居



神寶太刀二振粉川國鼻高龍頭古也

社傳云淳和天皇天長年中慈覺大師敕命を蒙り近江

園坂本より勅清せり其後此地八王子より御寄附ありしよ

と社殿も辨じ杜森にありぬ

源平盛衰記

堀河院の御宇嘉保二年山門の衆徒お辨伏を捧ぐ敷

辨しけしむ時乃園白師通公中勢丞頼治と侍を

召して只法に修せし路乞ふと作念しむれば其症を

蒙り神民六人死にる者二人云く去程不園白殿の御後

又比敷大藪崩る御所みかた侍と覚え又東坂本此方

より鑄矢鳴來て御殿の上にて之や思ふ是より其昂き侍

をててんせしれは是は寢殿の狐戸より此付し侍青

柳をとりしを不富お是園白殿の叢もつとも山

王の侍崇忍ろく思ふ事終りに御頭のこころあり

瘡出来させ給へり披露あり牛馬街に馳遠ひ輿車門

前に多し父大臣御母儀お政所御歎を斜りてかた

御祈りて給へり侍云く託宣しつとも遠くせ給ひて御腫物

愈させ給ひて御心魂奉渡させ給ひてこれを託候園田中

莊に殿下れ渡り給へりれども八王子小御寄附りて是

は園田同善海とて今も退轉あり

若宮八幡宮 中宮 鎮守社 並同村より田中八社の二なり

田中井戸 樹葉集藻藻草本に當國の名所とて窪村乃赤五丁許に草あどせめて

く長き竿をててその下に底ひれがくく泉乃堰とて其より人高きくまに入るは出か

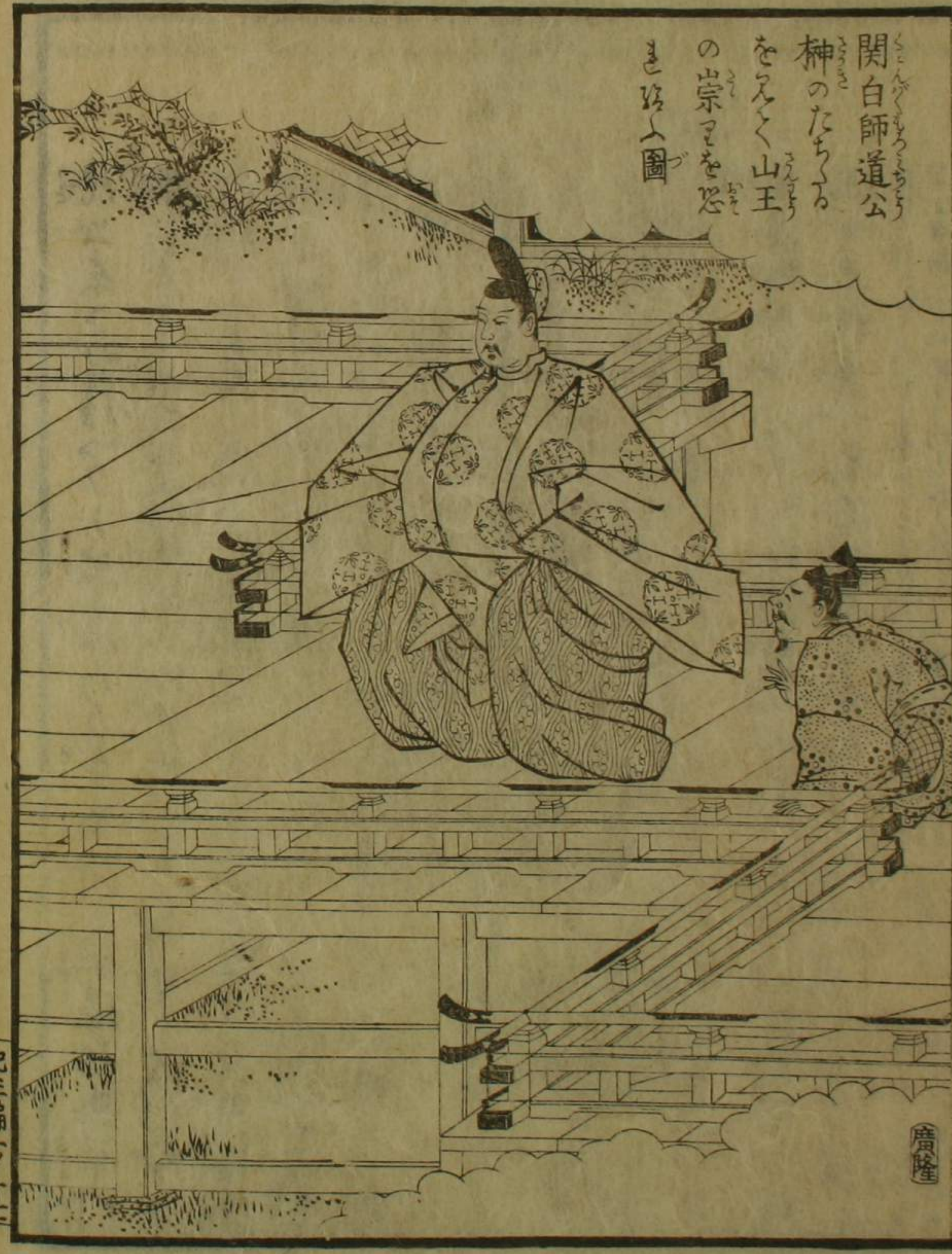
くして田中井の意地とて又これあり福井しりありを田中井ともいひ皆

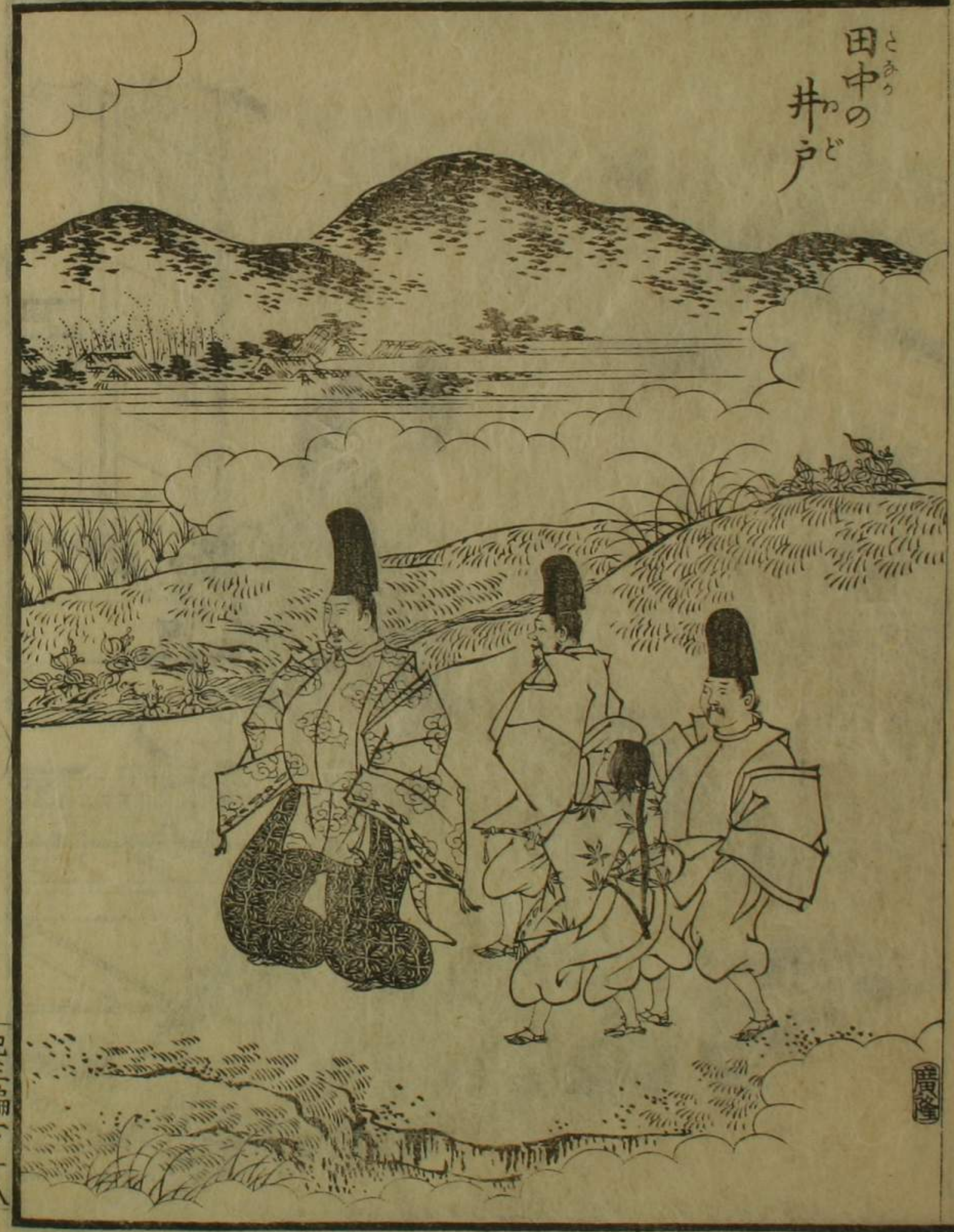
催馬樂 太名加乃井止尔比加留留太那支川女川女安巳女巳安

巳女太利良利太奈加乃巳安巳女 八田をけくく人よめといひ

池を引りて水をあそむるなり其より成田小寺を井戸といひ

まふあそむるなり其より成田小寺を井戸といひ





地系神崎村といひしを河國梨の作杖より思ふるも
しく生ずる或は多神崎を竹房と改名し修りか
大徳乃証生の地なればとて後年庇生利益はるふ里人等
當寺を建てる信作多し次とらん

元亨釋書云釋明善姓佐藤氏紀州神崎人年十一登高野
山翌歲難逢隨成尊法師學祕密法初金剛峯寺自從營攝
之始至此記二百餘歲院宇廢頽密學疎荒善懺念持明之
宗依正俱替苦修勵學度邁倫備未終十年兩部職位諸尊
軌儀無不貫穿南嶺密乘再興者世推力於嘉承元年十
一月十一日寂年八十六

良禪河國梨生地

高野山住生傳云檢校阿闍梨良禪紀州那賀郡神崎人也
俗姓坂上氏云永承三年戊子誕生其後隨中院阿闍梨

植槻藪

明善受兩界灌頂保延五年化歲九十二
所の茅蓋と稱しては戸に棲せ居りといふ中田庄の
の秋のころに植槻藪に棲居りては一時の住居なり
和國無位田中社從五位下と云ふ多し此の地は
此村の民は植槻藪の末裔なりと稱す由あり
後醍醐天皇の御時より
役免條あり

邊土村

此村の民は植槻藪の末裔なりと稱す由あり
後醍醐天皇の御時より
役免條あり

邊土山地藏院極樂寺

本尊地藏菩薩

什物

辨財天像

天正二甲申六月五日

安國寺

同村より今又廢れ
天正二甲申六月五日

放生池

寺の向

安國寺

同村より今又廢れ
天正二甲申六月五日

放生池

寺の向

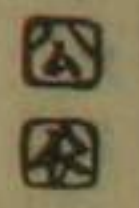
左清門智源直義朝臣八法名を惠源といひ右山と号し
佛法を信しけりけるか國を安し民成利とるる
志んばして竟小曆應二年天下各州に安國寺を創めん
成奏し即高僧碩徳を請して開山し或は古寺に再營し
て國家鎮護乃靈場とせりしとや

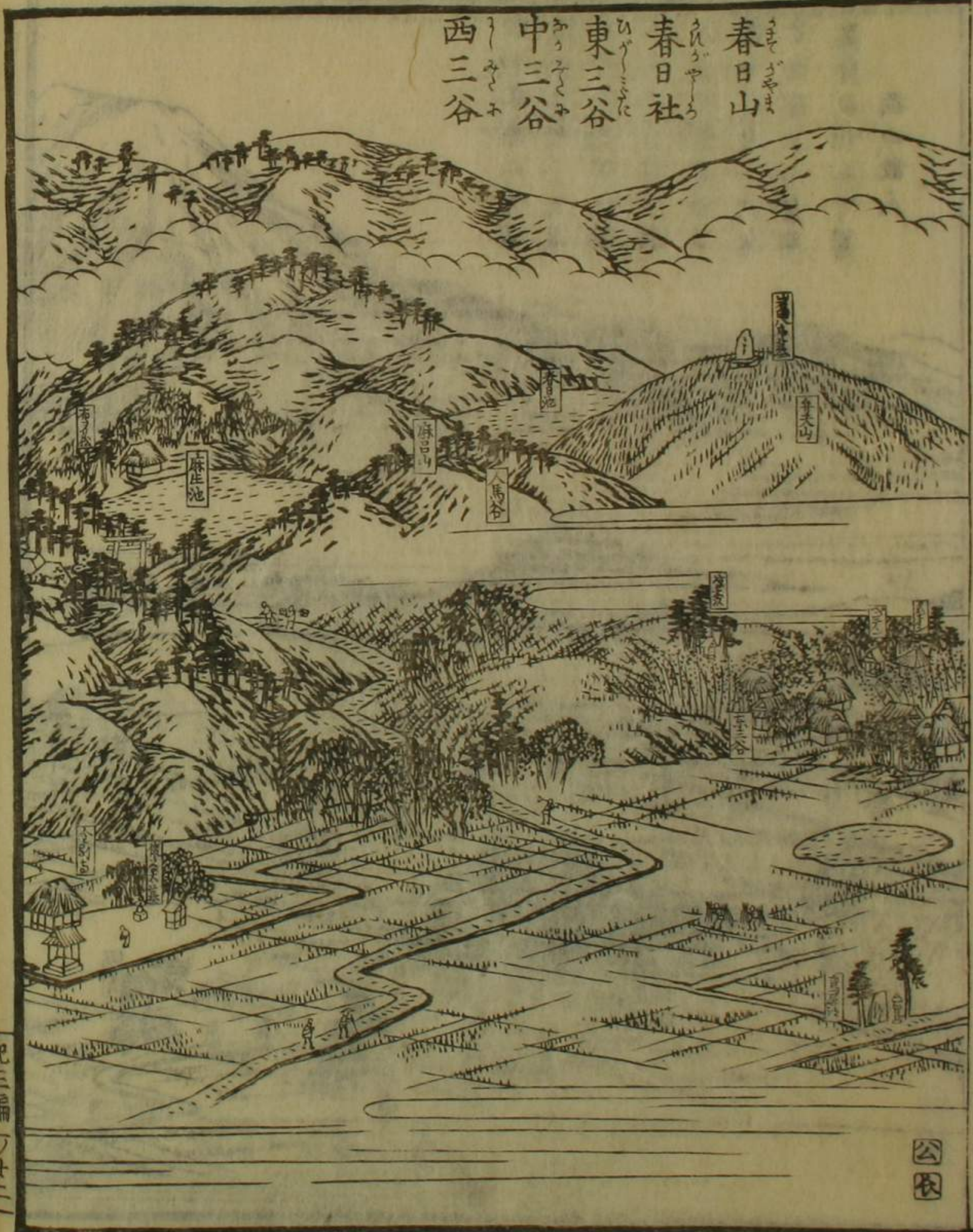


紀水東頭八采峰
 関南為許小芙蓉
 雲暗四國開眞面
 雪掛中天露冶容
 仙揚苦教經歲古
 靈池劍氣射波雄
 登臨賒酒山家興
 萬里風煙入竹窻
 橋山散人



龍門山
 竹房
 窪村
 山吹
 田中井
 黒土村





建初山愛深院金剛寺

同村より幸尊七葉中明上人の草創にして天正無幾の頃栗林八幡の所南再建れり

倭藤太秀郷碑

此碑をよむと秀郷の地を領せりといふ法文詳し

東鑑

壽永三年甲辰二月廿一日庚辰有尾藤太知宣者此間屬義仲朝臣而内々任御氣色參向關東武衛今日直令問子細給信濃國中野御牧紀伊國田中池田兩莊令知行之旨申之以何由緒令傳領哉之由被尋下自先祖秀郷朝臣之時次第承繼處平治亂逆之刻於左典厩御方牢籠之後得替就愁申之田中莊者去年八月木曾殿賜御下文之由申之召出彼御下文覽之仍知行不可有相違之旨被仰云々

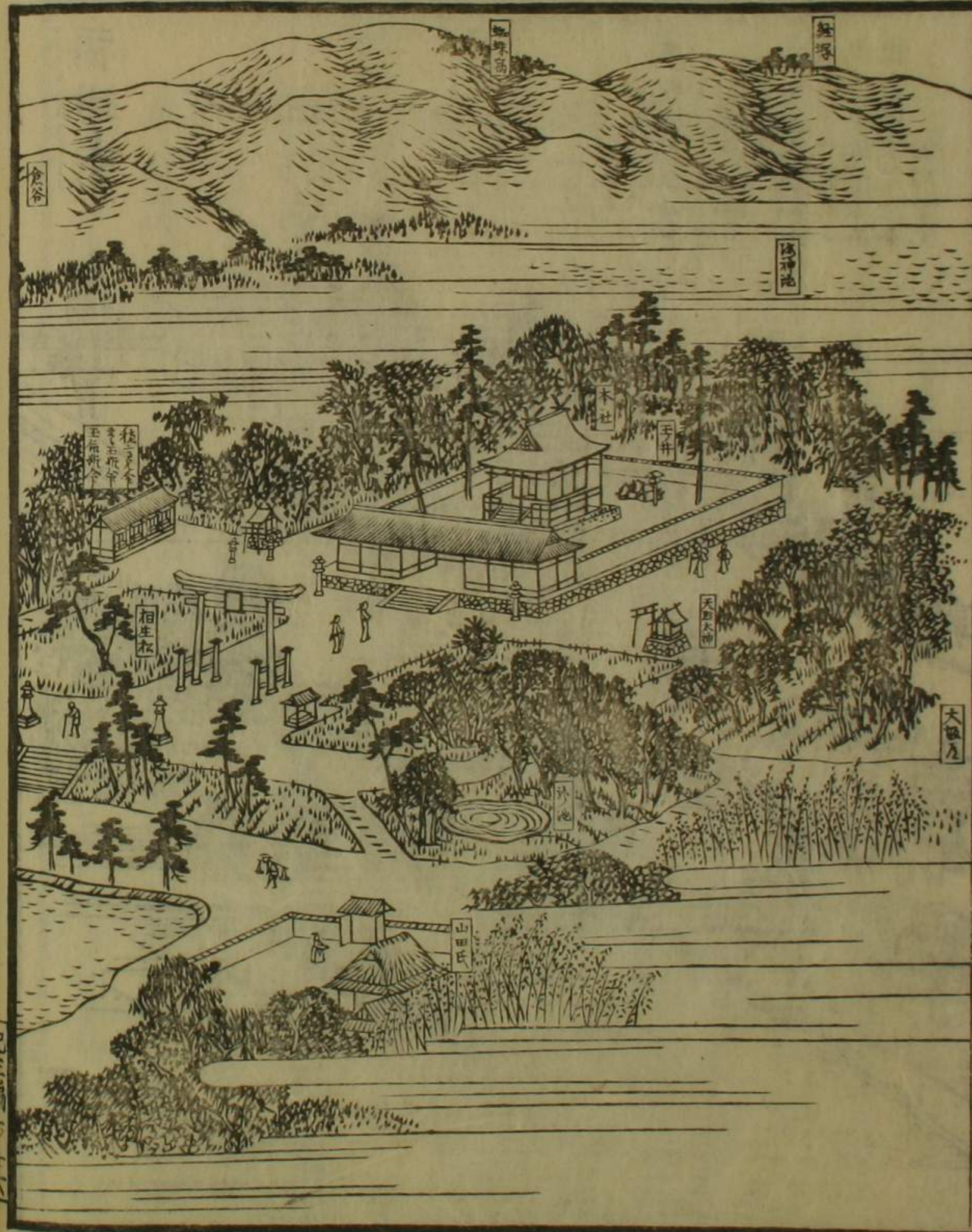
藤原泰成故居

池田庄中城表其跡詳し

粉川靈驗記云

藤原泰成ハ大和國依保任人なり是處の解脱上人の勅云十日十五の觀音此室号成多代生年十一歳より尚圍池田

庄より移住を當寺と地成まじり信作乃思ひあふ彼室号三年を經ていとも程意をこころ安貞二年五月上旬を病身小逼りす死す生ハ同日廿一日より腹中脹満して若病難堪只是觀音此名号と唱の座より移多ハ六月六日乃世の阿り爰想ひり病麻の枕小育音云此業を服とて一を子を授けり爰年ぬ婦を所肯を授けり是後海乃衣の而ぬ濕り相する瓜を授けり老僧好り水をこして去ぬ心中に思惟としく粉河の教書此授けりなり疑てこれハ紙に書たる物あり十口粒乃茶あり大さ小豆のどく又ハ麻の子小似りり水に磨和して服とる小重病立癒多身符平復しぬ男女老若く感徳ハ但一粒を遺さるるを悔也爰ハ明朝不意ハ一粒を取淨りり永誓中ニ納て誓も身を放りぬ播磨其書寫山の住僧貞舜と云りの去天福二年



其日常寺に於て敵後調伏を以て世に遂に速に滅亡
し其バ敵感更に後々其以寺号をも金岡山福琳と
改させ給ふとむ今寺領若干あり

海神社 神領村より地田庄 祀神二座 豊玉命 豐玉命

例祭 正月 秘年 七月十五日 末社六祠 境内小 玉の井 境内より古歌よりありる月掛

乃新とくみりけり 御鏡池 社中より水の池ともいふ此池水に神影映し

天正の兵火も神群は地中 馬繫れ松 二之拜所 神旅乃 鳥居

三基 一の寄居ハ社地より二の寄居ハ南中村 神宝太刀二振 粉河團次作

八月吉日作紀州池田 庄海林若團次とあり

延喜式神名帳

紀伊國那賀郡海神社

本國神名帳

從五位上浦上國津姫大神

正二位豊海神

三代實錄

仁和元年十二月己卯授紀伊國正六位上浦上國津姫神

紀三編一ノ七七

從五位下

社傳より豊海神と申すハ豊玉命此又の御名にして

上の世より熊野権が浦小坐りたるといふ此の御代より此社地より

遷坐し給上浦上國津姫神ハ和泉國の海中より改遷給ひ大本座

と載て神座畑小坐りて遂に世地ニ鎮坐し給ふ二神社殿と並に

給ふ海を故あるよりして上古より官社より列し神田とも多く

寄せ給ひつる小世の乱に續け社地を荒れしより一錢慶安二年

小坐て境内殺生禁札と給りり更に大社のかきり備りまるとり

行と名をあらむと代を二かにんを海とて此松を本言れ 本居大平

神領といふ名ありしとせ

里其名も神のまありしとていふも氏ももたれ業も 同

海神池 海神社の後よりあり

三熊山湯瀧院権現寺 新神よりあり

真言古義

奉尊不動明王

長三又 大師の作

熊野三所権現社 四月十五日 九月十五日 楊柳觀音 水月觀音

大磯虎石碓 虎の塚といひ傳へ縁起といひく富士の山狩り

曾我孫成自業歌 虎の遺物 杖の毛が足あり

南陽山十輪院傳法寺 同村より 真言古義 奉尊伽羅陀地藏 縁起

大日堂 奉尊の傍 大門 持國天 鎮守社 肉よりあり 東屋

權現社跡 古松一本あり 什物 打鉦 大磯虎の 古鏡一面 虎が塚

摩尼山寶珠院延命寺 勢田村 奉尊延命地藏尊 脇士不動明王毘沙門

造功挺地直磨天湧現仰觀多寶先豈音南山呼萬歲

紀三編一ノ廿八

莊嚴國土利無邊

薦坂峠 金剛寺の御あり 郡中より 和泉郡本村を越く 見塚の如く 遺蹟ありて 跡に大松

櫻池 志野村氏神社の右より 志野谷の水と交り 櫻野の百五十間道郷乃大地あり

産土神社 同村より 支村より 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社

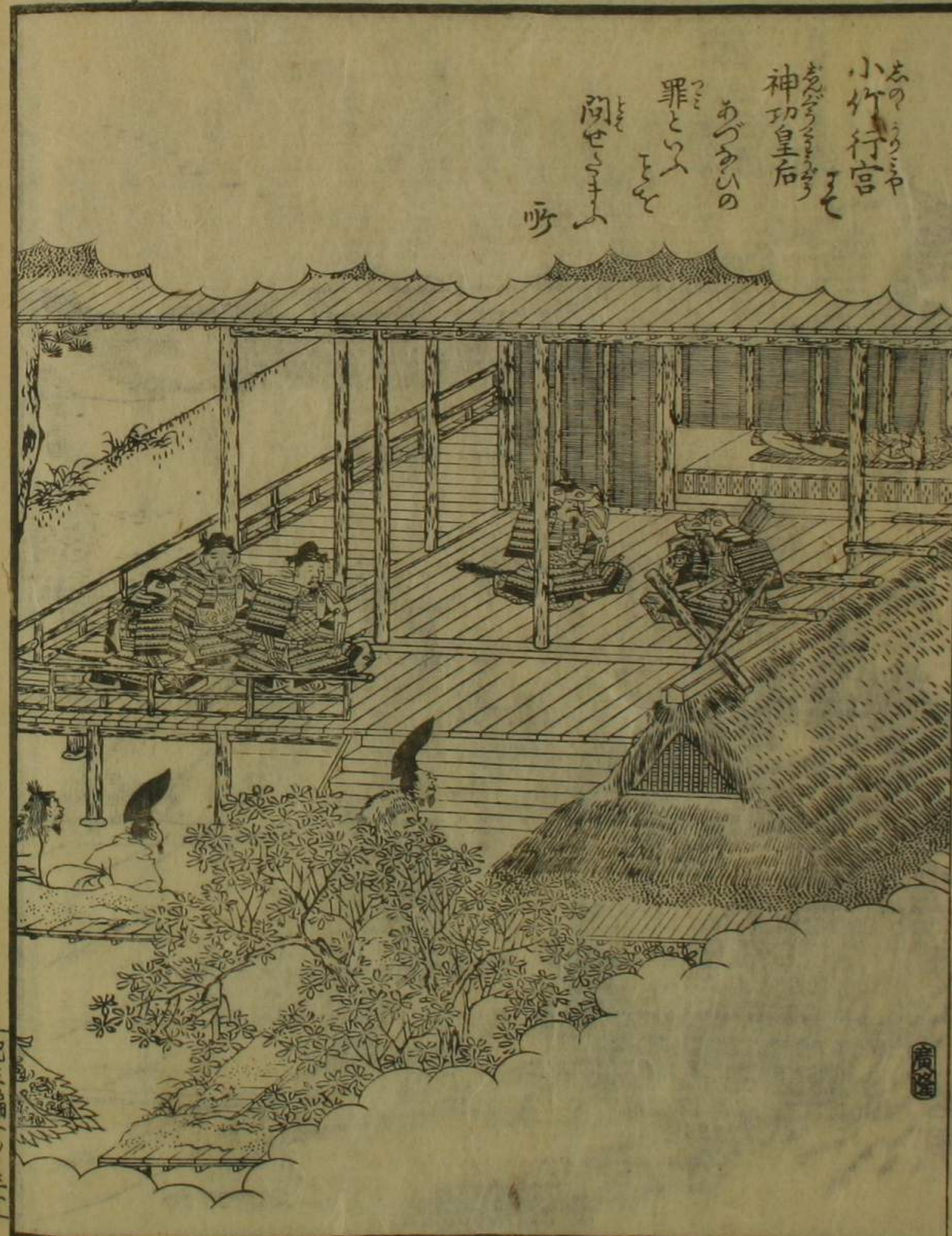
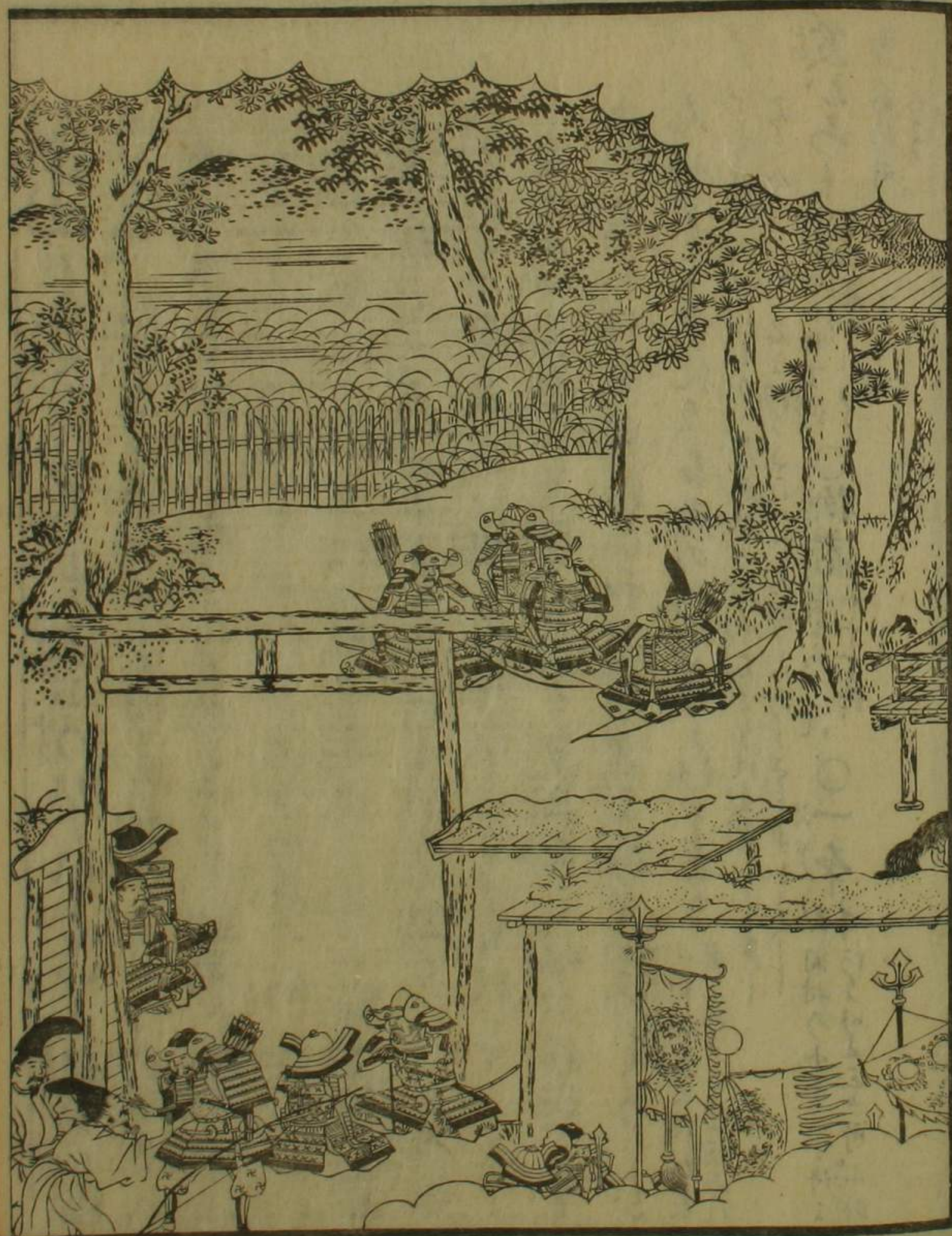
古碑二基 玉匠の内左右にあり 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社

当社東屋御前 以上より 此所より 鎮守 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社

再建あり 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社

小神功皇后乃 漸巻より 小竹天野二社の 祀合葬 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社

竹祝々 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社 奉社



天野親と云ふ友人とてまふ初かひいといて親しく侍
 りて小竹親病に罹りて身はゆるりゆるりて天野親血
 の涙を流しててとて歎きつて世よりい時より親友を
 む死にても穴成同くせんとしてその屍乃側伏して自
 に死むを合葬するゆりてとて委曲に奏しきり即ち墓
 を開きせしめ又移し其墓をこれ玄の如く移りて棺槨
 改めり各異変に埋せ給ひしより日記をりて
 く照て親皇の列らりりれを皇居甚く恨み給ひて
 より大本峰を越給ひ和泉乃方へ移し給ひたりとて
 人此事日本紀及古老の傳へりていよきり
 ともは地天野にちりて且志聖の名中なるに其書も多
 る今も二村の名に於ていれは和泉國にありて
 友おろり同村の廿三丁併 ○柳宿 廿三丁併
 のり所 廿三丁併

東屋峯 和泉の北にあり今東屋
 嶽といふ

山家集 仲夏月志 東屋嶽の北にあり

笠 東屋嶽の北にあり今東屋
 嶽といふ

千草ヶ嶽 東屋嶽の北にあり

山家集 己ひて 東屋嶽の北にあり

上人の衣鉢を拵む所といふ故に東屋嶽の嶽
 音田の名所といふ

大本嶽 和泉の北にあり今東屋
 嶽といふ

如意山蓮華院觀音寺 長田郡別所村にあり
 世に長田の觀音といふ

樓門 和泉の北にあり

鐘樓 和泉の北にあり

茶所 和泉の北にあり

三重塔 和泉の北にあり

古老傳云 和泉の北にあり

専修院 和泉の北にあり

人 和泉の北にあり

して同山翁色成りけハ別聖如意輪觀音の尊像なり沙門
 とも沙門を慕ひて金を與へる像を乞ふ翁も金と許し
 像成ると先々南都を以て去れ沙門草庵よりせ帰
 了る其像を安置し朝懺悔念ふ所し其後奇瑞日に
 新し香花の容彩をあせり星霜うつりて天正年中玉
 子堂舎焦去とかりて其像のこぼれ小堂成免をしを
 元和年中薩州の沙門道譽も廢絶を嘆きて小堂成免
 其地を巡遊し輿を寺門小寄給ひ民屋の間に接し
 子不可なりと命し給ひて今此靈地は移させ水田若干
 を寄して厄難消除乃祈願所として新再興の志を勵
 し給ひしより一伽藍の場とありしを後厄除觀音と稱
 して毎年二月上旬日よ八日方の道俗隨在瞻礼し多福

糸をゆり憧々として 怪稲麻の如し
男女厄年の事申古の
書小多く是れ和年と記
す
 多に備づる幸ハ水鏡の序小記しむべき事ありて二月の和年日籠蓋寺に傳
 でたり云く今年七十三と云ふ事ありて三十三を過ぎて相人ありて中
 年のありしは固寺ハ厄をてんと給ふとありて和よりより
 一みの年毎に云はれ給ひの和年日すわすつる事ありて和よりより
 傳はる

○古墳 大門の側より何人
乃懐りやあはれ

藤の井戸 同村の南岸あり私法大師湯をとめて
か持しあはれいしは冷泉涌出せりとて

猿引 上田村の猿屋極悪とて所より位はあ敷二十餘年
あり猿引由來の記投せり幸長けを載せり

ちり引の猿衣裳もあつらへ給へりす中どの虫平 拾栗山人

風森大明神社 島村より長田庄六ヶ村の 祀神三座 中央村長久部左
氏神なり例祭九月中吉日

○末社 船形末社 神宮寺 幸社の側
船形末社

家集 杉河寺にまうてつとて風の森といふ所にて

いとあもそれのほろろあざらえらむ吹風森 大納言公任

夫木抄

うらみか風の森なる橋たさそとけりあまう候も 鷹司院按察司



公
家



長田観音

いのろみハ

いのみち長田の

観音者

元々さつこの

ちのい

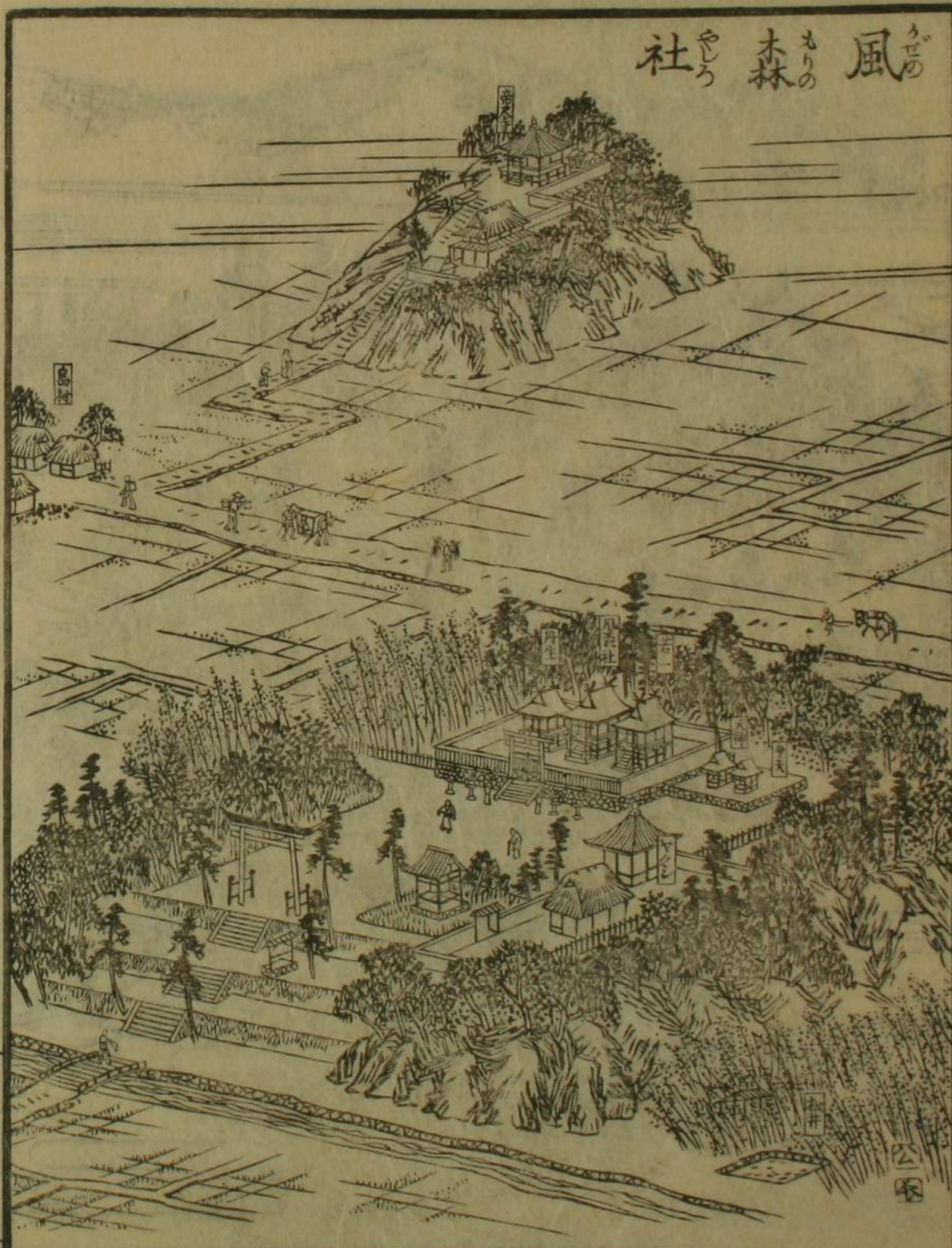
白のち

十六

梅友

龍三編三十三

風市森社



風市森 一名つり

とやうに川の浪もきつりおきおきつり風市社敷

とやうに川の浪もきつりおきおきつり風市社敷
 といふ所の川浪もきつりおきおきつり風市社敷
 といふ所の川浪もきつりおきおきつり風市社敷

粉河八条の御書よ

粉河寺の西南十八丁計より官符小西限風杜といふ是なり
 當郡の名所として伊勢風宮を遷し科長戸部命と丹生明神の
 二神を祀りてつりおきおきつり風市社敷といふ是なり
 志事り社老桜葉より南小馬場より紀川より横上流を左右に水
 田渡回町を照しつりおきおきつり風市社敷といふ是なり
 つりおきおきつり風市社敷といふ是なり九井を穿てせつりおき
 井のかさつりおきおきつり風市社敷といふ是なり東に松井村に隣り
 そのつりおきおきつり風市社敷といふ是なり河川の長者粉河寺
 所なり又大納言公任は粉河にまうで次ふつりおきおきつり
 和歌あり

風市桜花

左中將氏敷

勝地得名春色奇林中錦繡百千枝花開花落憑誰力

日、日東風風伯祠

中ノ神もん成るべきを其のたふしに上敷此處 武衛為久

恩賀故居 杉井村の七畑

乃中ふりり

恩賀の宗初別當法後嫡子なり清和天皇此真觀年中に
御不徳の事ふりりて恩賀を命じりて當寺にて七箇日の
間日別一萬卷の觀音經を將讀御卷教を上奏せし小御
忽小平金を執賞によりて法橋に任ぜり侍于時恩賀系流の
妻小尚國那賀郡の廣田の益旅といふ者年来の遠恨りりて
宇治橋に色ふりて誅害せんと擬以詠次人ありて此由を告ぐ
恩賀心中に歎言成念トされし俄小風を起り雲霧騰り
して多矣小橋を渡り了ぬ天晴く益旅系下此人小寺侍
小於河の別當とてやハ御室戸の者居を召ぬといふ益旅思
惟とて恩賀ハ親音擁護の者なり害心成改むり一布住居
して子細をかりりて父子此契約成りりる

帝釋寺 同村より 本尊帝釋天 宝龜年中の教願寺といひ今ハ大ニ廢

紀三編二五

奉玉山西院中山寺 始元牛玉堂印とて諸方へ出ん今ニ絶ぶ 本尊阿彌陀如來 脇立 觀音 大日

當寺ハ於河寺ハ本朝大伴孔子右の末裔方流乃建る氏
寺とて古ハ端堂盛大なり一とて當時ノ丸瓦一枚今に
沙より其巴れとてりよ凸文あり

大伴船主故居 同村の東より於河

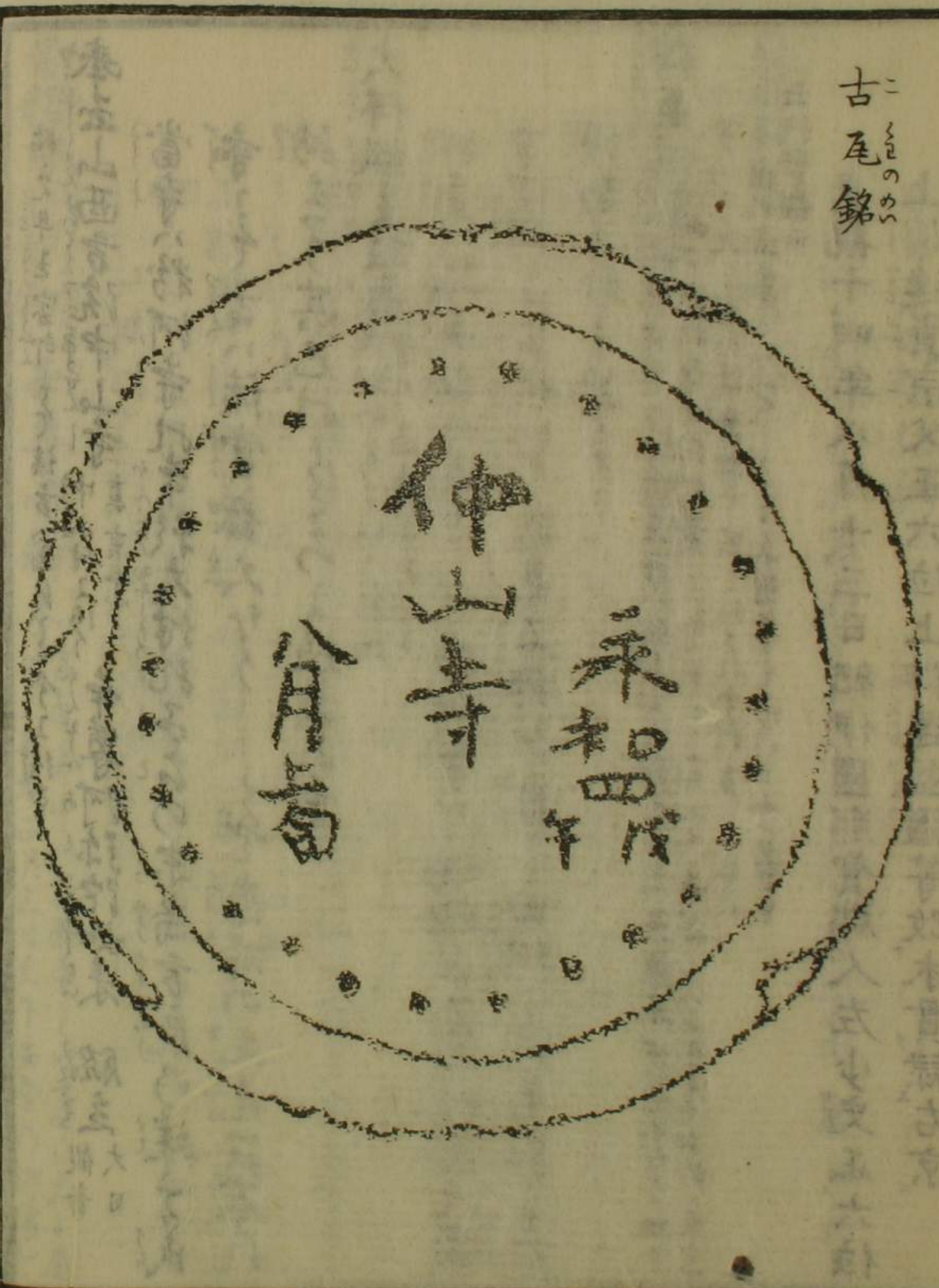
船主ハ孔子右の子として於河寺乃縁起り又由故居北南
守丁坪に古墳あり近來石擲を致る田畑といふ是船主の
墳ありむとてり

伴益繼故居 其地詳るハ益修ハ孔子右の裔として貞觀年中於河寺に和て

其地詳るハ益修ハ孔子右の裔として貞觀年中於河寺に和て
伴益繼故居 於河寺の傍別當とてあり是を宗初乃長者といひ其子山雅真宗
等より孔子右の後裔教十家とてり今於河寺に存り
本國の名家といひりりり其系圖をもあれと今畧す
三代實錄云

貞觀十四年八月十三日紀伊國那賀郡人左少史正六位
上伴連貞宗父正六位上伴連益繼等改本貫隸右京

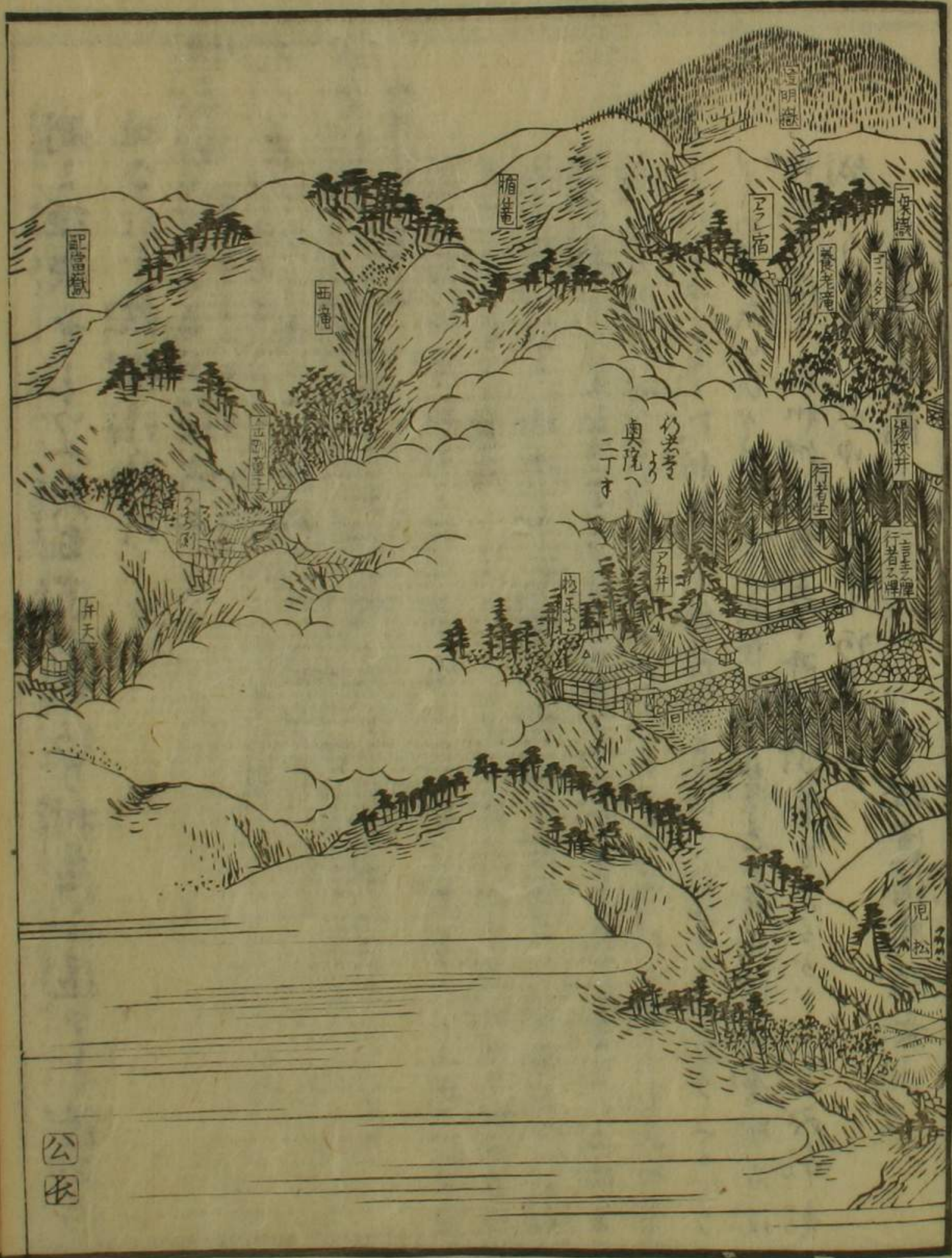
古尾銘



紀三編三十一

八幡宮氣鎮神社猪垣村よりニテ
廢誓度寺同村より

ひう粉河寺おふがくせいとて佛經の深義を研究し其僧
十人あつて寺中ぐくわんの學問所を建て誓度院と号すと
そに會集せり其後粉河寺大門建立供養の時由良の法
燒圓師を導師とて當所を請けり小教門奥隆此功多
くりく張附の乃ふれ十學生より當院を圓師に附
與せしより遂に禪家乃寺と名せり其弟子玉上人永
享二年成八月に院を猪垣村に移して諸堂大に成り
然る不足利義教公帰依淺く大慈山誓度寺と山寺
号を賜ひ寺領も若干ありしも星霜移りて終に
廢類せり然も建長年中より明應の頃この論旨院宣
願文寄進狀下知狀女院方より乃御下文等其類凡て五十



公長



中津の津河

紀三編丁世八

中津川
十八丁

側は極樂寺とて天台宗此寺の村落は遠く清閑の地を以て律僧住持にして

釋本宿 同村の嶺頭松樹茂る中に

大人星跡 釋本宿乃小川の地に凹みたる形星跡と

五帝松城 大人星跡の由又六丁にあり中津川村を去る多入十丁

粉河八条の河云

かつたを幸和則より岑長くして純の粟若とて所ふつは
まををまへく葛城といふまゝ小役小角修練の名跡なり粉河の
後には死多嶺手として傳へる葛城の横松より宮符といふ
限横嶺といふ是あり見るも小憩まを守天の憩い雷公ハ山腰
高く白雲の雨さるぬれさるるは花の峯は白雲とあや
中れ山中まゝに村里より緑樹より雪は紅葉は日移りたる
くの足系といひごとく又横松の憩まは浪波滔湏磨明石
路紀乃浦々大和河内を至る所の紫葉と見るごとく
紙ありて旅人乃ゆさるるもなり

葛城晴嵐

拾遺補閑致長

雲霧葛城山壑閑嵐光春日最佳哉春花秋葉好風色
都映金園寶樹来

前八座為信

かつたをまへく葛城といふまゝ小役小角修練の名跡なり粉河の

粉河町 伊勢郡那賀郡中中央に去地處く南方ハ高野山ノ通ナリ川ノ源

香花の客居を以て舟を摩りて交し落葉を人取日ハ五法を

て高賈市郡郷を並べ南町ハ田舎屋敷に希といふ家乃り尚所親音縁と

鳥居坂 粉河町の入口より昔大倉居あり同く

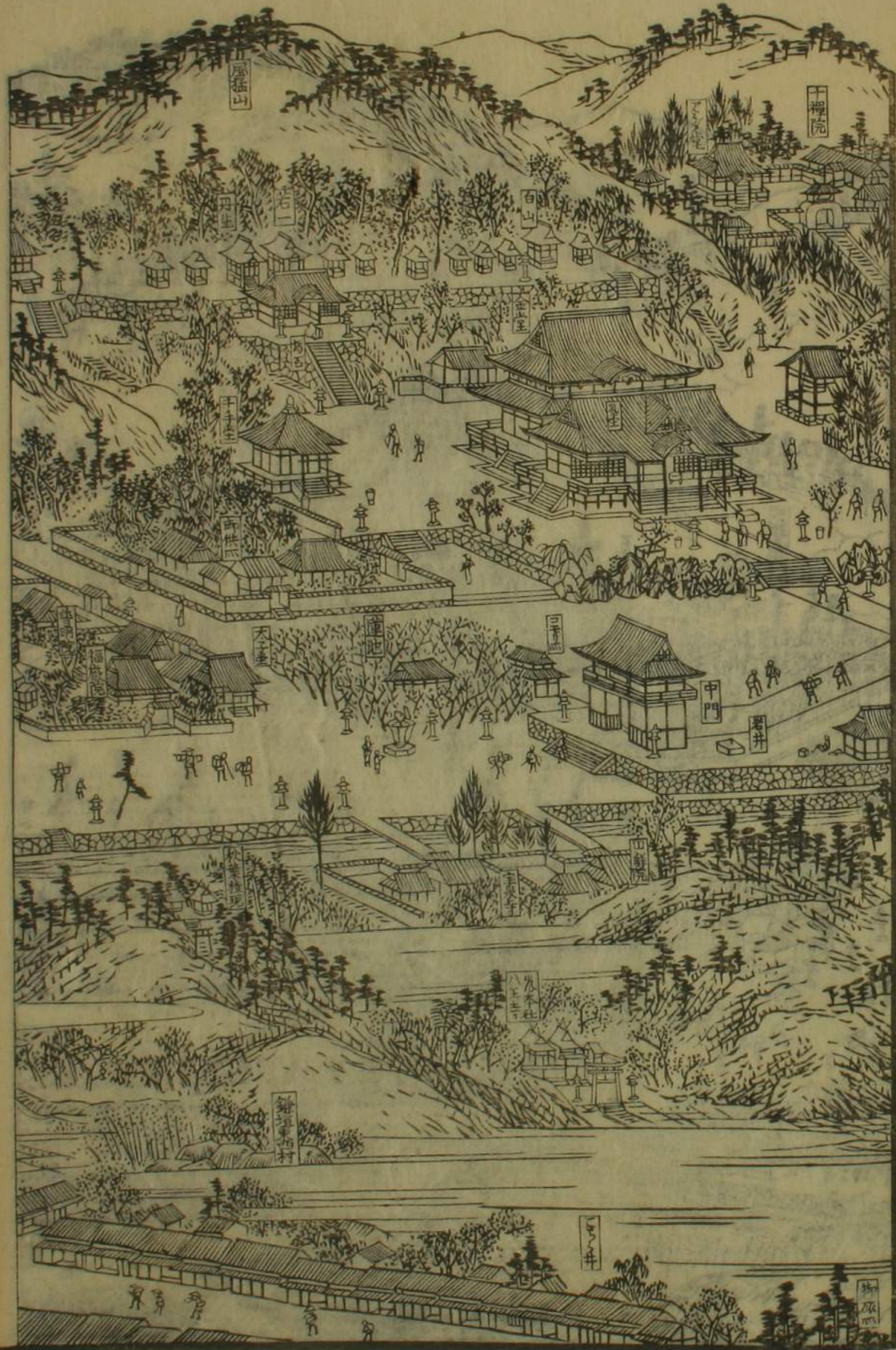
産物粉河酢 町内製する家多しむりやんてわさつりよりおかどく

粉河蒟蒻 町内製する家多しむりやんてわさつりよりおかどく

粉河團扇 町内製する家多しむりやんてわさつりよりおかどく

粉河團扇 町内製する家多しむりやんてわさつりよりおかどく

粉河團扇 町内製する家多しむりやんてわさつりよりおかどく



小社三祠 中門の外す丁遊しあり八幡舟材天春日の三社お並ぶ舟材
 又天 河内國澁河郡馬馳市佐々妻が女をふりしり
濡佛 三社の例 **上宮太子殿** 西より **出現池** 池ありり所 慈池の一あり
中鴻堂 出現池の南中より **三角堂** 中島堂の例より千子親言
馬蹄石 出取池の傍より **常念佛堂** 池城の巽より堂中の類
 島山満家の碑を納む **真觀寺** 殿通瑞津門尊儀裏まき一基圍の瑞男島山
 尾張守満家後五位下管領永享五年九月十九日卒康正二年冬保持國
 位血而立たり又應永廿八年満家蛇明料寄附状あり永享二年冬保持國
 二年四月廿一日歲教將軍系信乃時封國も信長して山池坊に宿る **童男堂**
 坊の東にあり童男行者の遺像を安置於河守縁起に詳あり又童男佛乃
 縁起も有りむ **保元** 乃比り **中池** の位傍と一山の危傍と縁起ありり
 佛像を據て由良乃 **長郷** 一安並し **後** 二百二十二年を建て **揚柳井**
 文明十八年 **長郷** ありて **志** ありて **志** ありて **志** ありて **志** ありて
 童男堂の前より **九井** の **地藏堂** 西より **不動堂** 西にあり **傳大士** 不動
 一あり大石をぬく **羅漢堂** 南より **稻荷社** 南より **殺生禁札** 大門の内 **東塔** 西
 南より **羅漢堂** 南より **稻荷社** 南より **殺生禁札** 大門の内 **東塔** 西
増 康和三年紀伊守朝 **地藏堂** **十王堂** **毘沙門堂** **護摩堂**
 増 補給及乃草創あり **大門** 本堂まで丁遊しありり **念佛堂** 大門前より **蛭子社** 大門前より **下系札** 大門橋
 慶長基趾 **大門** 施音寺より **類** をくけり **下** 後世兵火に焼失ありり
 集ふ以類の **念佛堂** 大門前より **蛭子社** 大門前より **下系札** 大門橋
 妙法あり **念佛堂** 大門前より **蛭子社** 大門前より **下系札** 大門橋

大門前丁件より **わくやの井** 大門前す丁件 九井の一あり **茶師堂** 方二丁件より
嵩山 光仁天皇の寶龜元年大伴孔子右と一人の草
 創ふして西園三十三所乃第三番と云く天下み隠是か
 此靈場より折此地より葛城の嶺連りて山足南方に延
 縁して別の一峯を起せ侍を風猛山といひむ **林樹苑**
 贅として人跡稀あり **會** 歎乃類を得てを **白**
 るその **其** 近郷 **大** 伴連孔子右と **武** 武吏 **河**
 其子を **新** 主といふ **新** 主 **鎮** 守府の軍曹 **小** 伴 **将** 軍
 の旗下に属し **奥** 州 **孔** 子 **右** **射** 獵 **業** して **常** に
 風猛山乃樹林より **幽** 谷を **遊** して **身** 城 **樹** 上 **居**
 一 **猪** 豚を **食** ひり **或** 者 **孔** 子 **右** **左** の **眼** 眇 **有** りり
 して **光** 明 **赫** 奕 **と** して **大** 笠 **は** **日** **お** り **光** **あり** **孔** **子** **右** **奇** **異**

を熊野山より河下向の次ノ當寺不通也一語ハ 後白河
法皇ハ當寺に藏せ侍之尺の尊像を極して京都世之間
當の例小千手堂此中尊と一語ハ拵圖家も亦信作厚
く永承三年ハ宇治殿永保元年ハ京極殿康治三年
あハ知是院殿元久元年ハ松殿先師を遣ひ系信一語ハ
將軍家トてハ應永廿八年足利義持公永享二年ハ足利
義教公おと御基所トてハ香華を多し語ハ都鄙乃士庶
の服系もいつとをいしおろり堂塔も多敷凡て又百有餘宇に
及び一或天正年中豊右衛門の大舉ハ五々皆一時の盛去と
形ハ一やろん慶長以後天下治平不属して廢を起し絶
を終ご稍古小復さるり或得るり後又屬自火の災いり
つども再建乃切速りて極真此災たりかハ實ハ盛る
る靈場といふべし

大政官符 紀伊國司

應免除粉河寺所領鎌垣東西村四至内雜役等事

在那賀郡

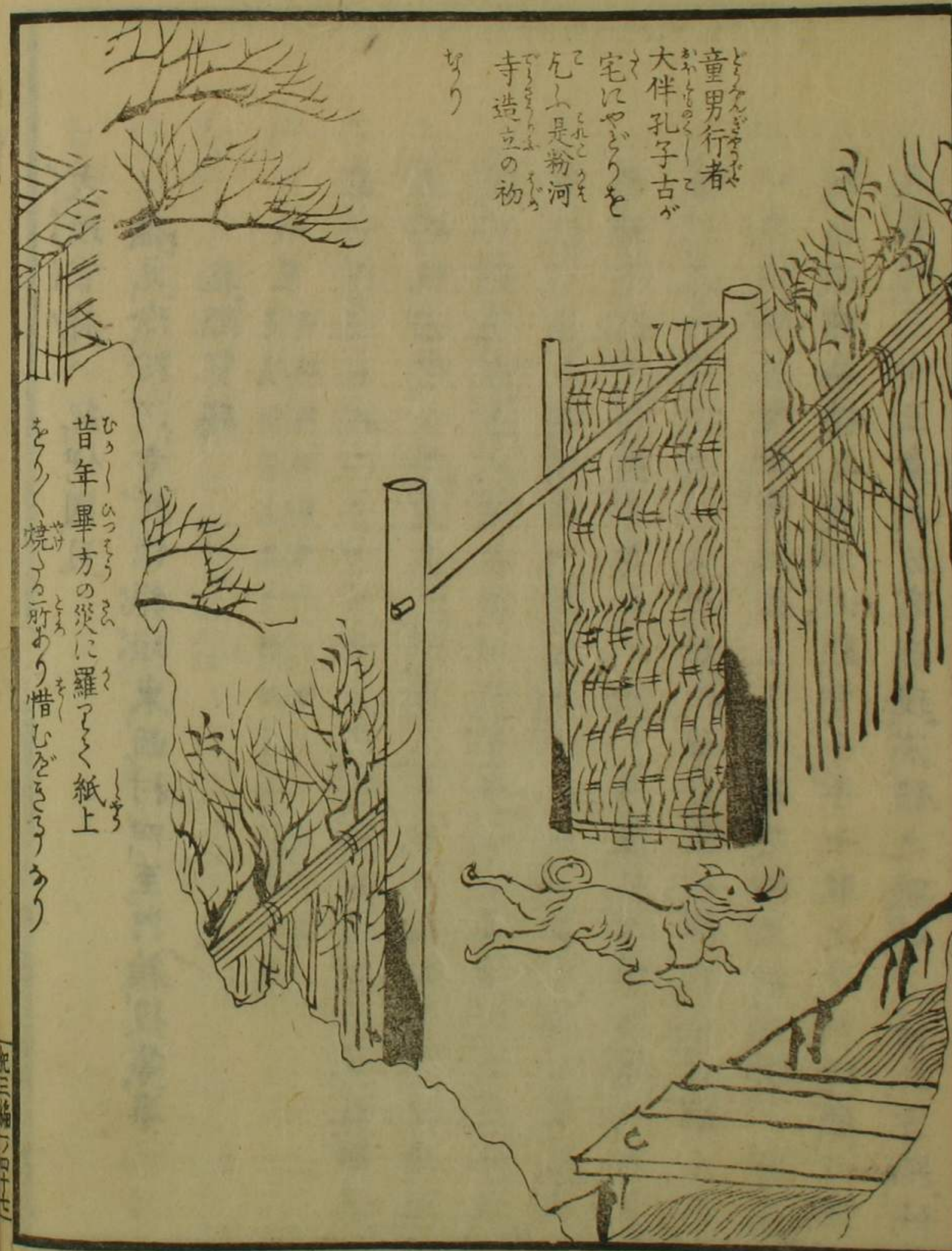
四至 東限推尾水無川辨財天南限南山峯
西限風社柴尾門川辨天北限横峯

右得彼寺永延二年十月廿日解稱謹案舊記此地白粉流
水時現神變之相黃笠放光屢示希有之瑞點處而發願結
柴而構庵未及人間之力功顯紫磨金之尊像以之稱粉河
寺以之号自然佛矣于時大伴連公孔子古奉爲公家以去
寶龜年中所奉造也玄武山峙於後靈嶽雲聳北闕之臺青
龍河流於前法水浪唱南無之聲自來以降到今無懈怠就
中奉祈國王聖朝寶祚獻上年中兩度御卷數殊蒙 宣旨
既爲御願奉修之庭加以斯寺千手眼之光明好照心懷
之暮暗三十三身之分容亦現滿願之曉晴三維北方繞仙



今其終を寫せり
下の二圖も
おまへ

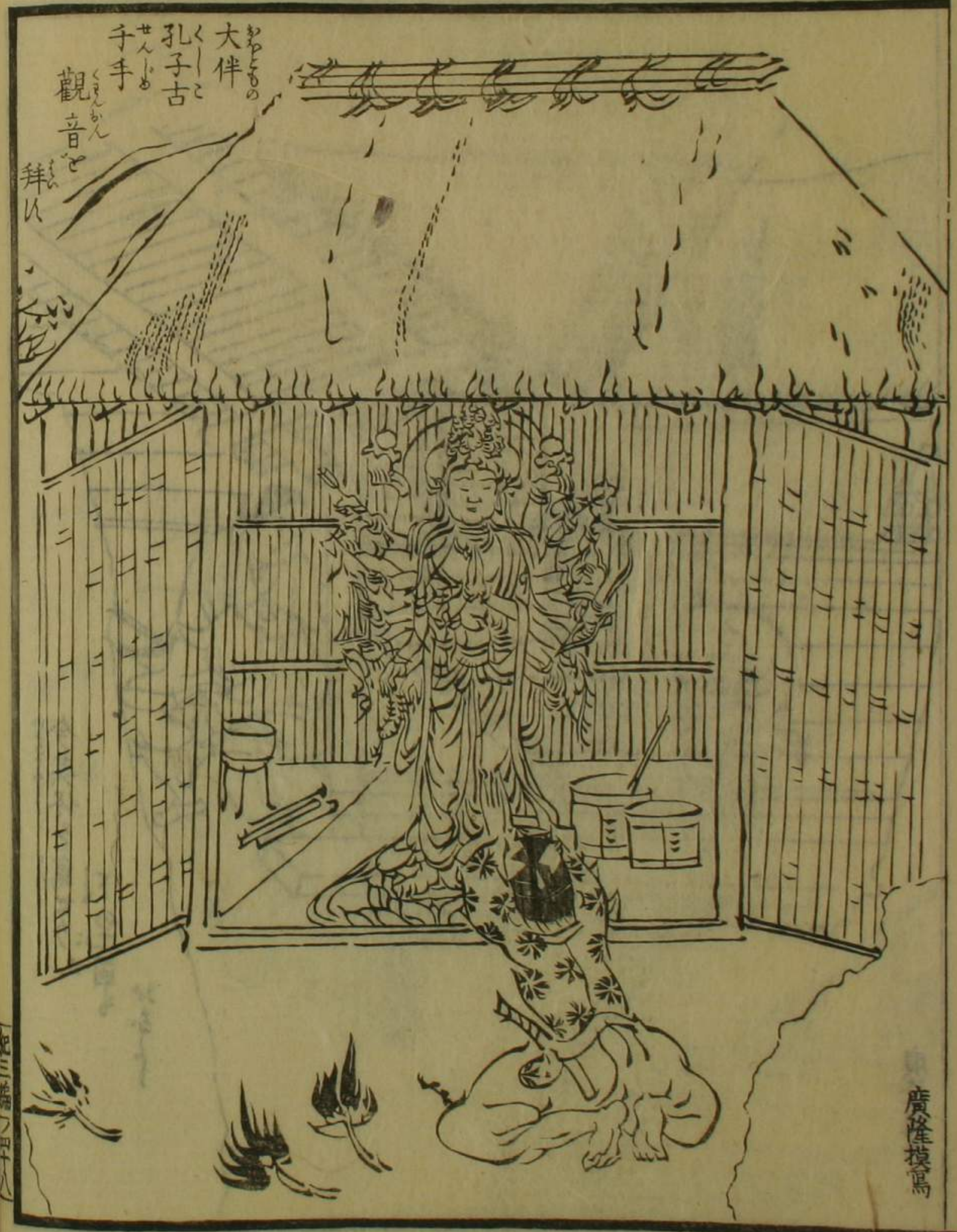
廣隆模寫



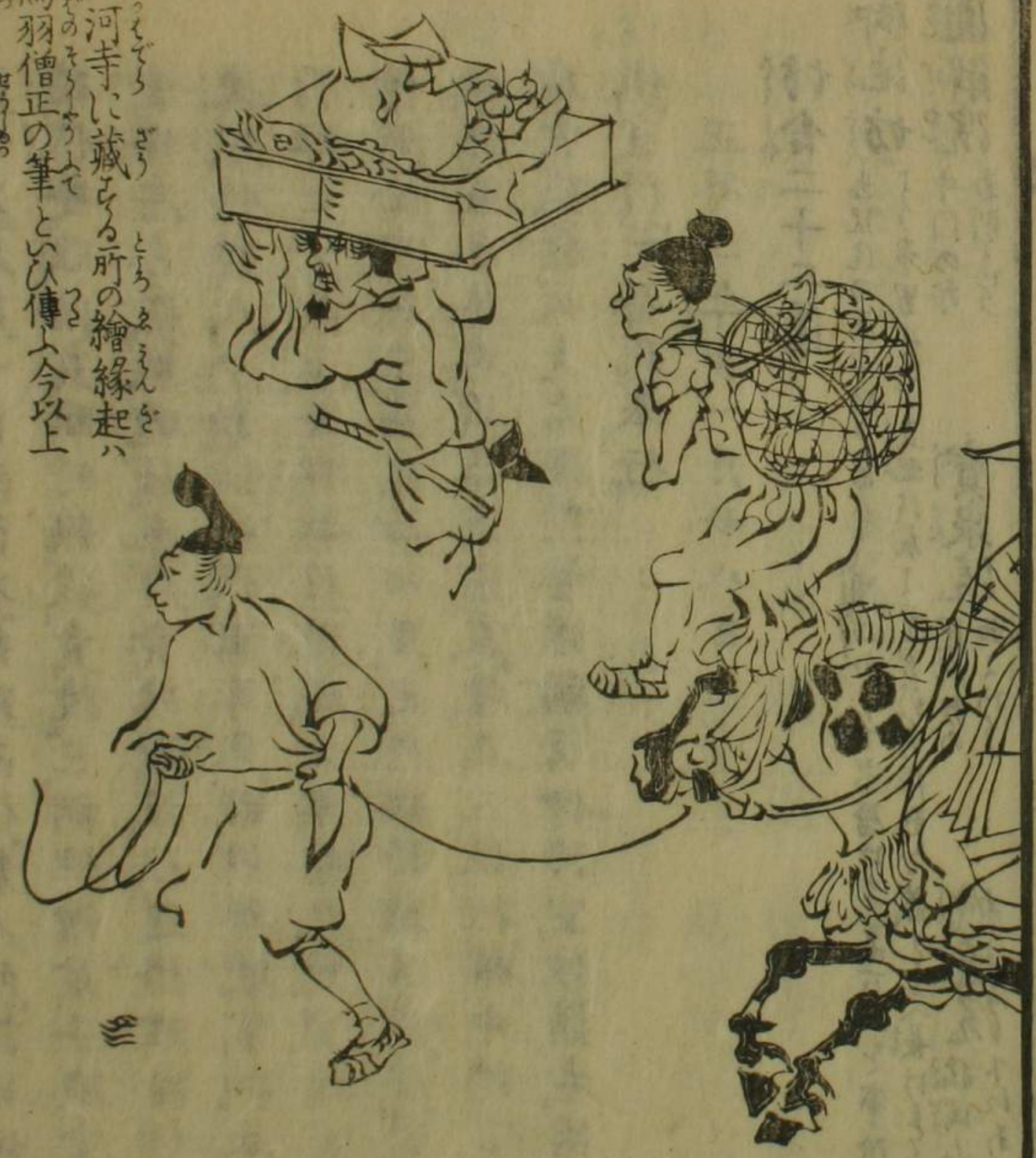
童男行者
大伴孔子古
宅にやどりて
乞ふ是粉河
寺造立の初
なり

昔年畢方の災に羅て紙上
を焼く所あり惜むをさうあり

三十一



粉河寺に藏る所の繪縁起ハ
 鳥羽僧正の筆といひ傳へ今以上
 三圖を抄出也



丁酉春
 廣隆模寫

洞而爲鹿苑一角南面有拜路而住麓人所謂鎌垣北而已
 時代變改附負臨時雜役責陵三綱住僧弟子職掌人等爰
 堂塔房舍從風破損參拜貴賤競浪往還修理造作補護裝
 束以件雜人令勤仕代代國司免雜役租稅官物永爲舊例
 而郡司背其旨差課雜役付煩公事愁在斯望請官裁因准
 傍例給官符在國免除四至之內臨時雜役將停國郡之責
 休寺家之愁奉祈鎮護國家者正三位行權中納言兼太皇
 后宮職權大夫右衛門督源朝臣伊涉宣依請者國宣承知
 依宣行之符到奉行

正曆二年十一月廿八日

坊舍二十二箇

御地坊 出流池のあしりり當寺此頭坊として宝曆中平高百石を寄附せし坊
 圓解院 中門の介
 寶泉院 圓解院の
 依德院 猿岡山の
 下にある

普明院 志子寺の

威祥院 普明院の

惠門院 威祥院の

吉洋院 惠門院の

至誠院 吉洋院の

福嚴院 至誠院の

松壽院 茶師寺の

德壽院 松壽院の

蓮乘院 德壽院の

福壽院 龍膳院

良福院 福壽院の

圓藏院 良福院の

津院 中きれ良方より此地居古の空餘地より近來

上土門 空擇強といふべきの類あり

延命院 上土門の

本堂 亞相老公乃沖筆あり

六社壇 本堂の隣にあり

鎮守二社 社神 若一王子権現

鎮守二社 社神 若一王子権現

小社九祠 鎮守社の左右より

鎮守乃若一王子権現の東野村より遷しなり丹生大

此壇より此社建おびくつと神々しく中も

明神の名も若一王子権現の勸請しき所なり

よ大伴弘之氏奉祀と云

○六社壇 本堂の隣にあり

○鎮守二社 社神 若一王子権現

○鎮守乃若一王子権現の東野村より遷しなり丹生大

○此壇より此社建おびくつと神々しく中も

○明神の名も若一王子権現の勸請しき所なり

○よ大伴弘之氏奉祀と云

○例祭毎年六月十八日此色なりの儀なりに余なり礼なりなり
十七日の朝なりに彼車なり樂なりとてお成なり多く引入なりて

かしく皆火なりとてしめ拍子なりやうおどしてゆく
門の方より二なりにすびくつ先なりく多なりれその
りり志なりりやと海なりの先なりふまて何なり中なりんくを車なり樂なり此なり上なり
一居なりをのころ皆なりありてしめそのもやをぬきを
る貴人なりの儀なりくあやとあ中なりくむよほく十なりは又
案許なりやうき此馬なり帽子なり素袍なりよち刀なりをた矢なりおひあ
馬なりよのやそれども多く連なりり弓なりを携なりもりり志なりり
後なり方なりの儀なりくつり者なりどもくを馬なり系なりといつや
あくよ後なりふよりくさけはくを随なり兵なりと稱なりして氏なり后なりよ
己年なりくまうりくはきよ出なりるなり此神なりよささくは尤
希なりくて人なりの弱なりくすやとては是なりは寺なり乃なり開なり基なり大なり伴なり孔なり

紀三編一ノ五二

子なり古なりを摸なりぎれすくべ一弓なり矢なりを帯なりせよ獵師なりれを
己なり扱なりを和なりり稱なりり出なりるハ昔なり成なり馬なり一のせ若なり笠なり中なりの物
小紙なりの志なりでさうりけ山なり多なりれ尾なり廿一節なりりをき中なりい
乃なりれさくあり面なりも解なりも彼なり志なりでさく包なりめれを
少なりもんえ次なりく幣なり帛なりを馬なりみ積なりるさくくはく其
外なりどもさくも多くはひくは是なりを栗なり栖なり乃なり一なり物なりとい
栗なり栖なり此里なりよりハ又里なりをりり宿なりよりさうでさく坊
二宿なりり居なりるを七度なり中なりの使なりを中なりりて後なりよ出なり来るあり
一なりかりとて余なり按なりどくはむ一保なり延なりは年なり徳なり大なり寺なり中なり將なり
公能なり御なりより彼地なりを此寺なり一寄なり附なりをれり多なりお小見なりえ
己放なりありさくを領家なりより家司なりおどして余なりよわくさ
一が例なりと形なりりて今なりもかかさく由なり設なりるなり一史なり縁なり起なりよ
んえこれ河内なり國なり左なり右なり夫なりが女なり瘡なり瘡なりく後なり世なり觀なり音なりと為なり信なり

同

此歌を素言法師のまゝ出家し侍りしれども粉河の歌をよ
みててなれんしてやがてあまのつらきつらき所にて出家しつら
くあまのつらき佛は修りして法をよみて侍りしれども
よつかりてなれんして侍りしれども

此歌あまのつらき寺の別當なり侍りしれども粉河の歌をよ
みててなれんしてやがてあまのつらきつらき所にて出家しつら
くあまのつらき佛は修りして法をよみて侍りしれども
よつかりてなれんして侍りしれども

風雅集

補陀の海城はこれおまじみらめもつらきつらき

新拾遺集

此の歌は長治のあまのつらき人目まじみらめもつらきつらき
つらきをよみて侍りしれども粉河の歌をよみて侍りしれども
よつかりてなれんして侍りしれども

家集

此の歌は元四年四月廿日粉河寺勸進之三十三首依夢告勸進之
置一字上於粉河寺歌三十三首和歌一首とたて載れり

一紀三編五十三

千首

右三十三首の弄冷泉為久卿自書して當寺に納められし一巻
今も侍りしれども又同一三十三首類あり冷泉為村卿及それの人乃
較せり

三十三首歌の中

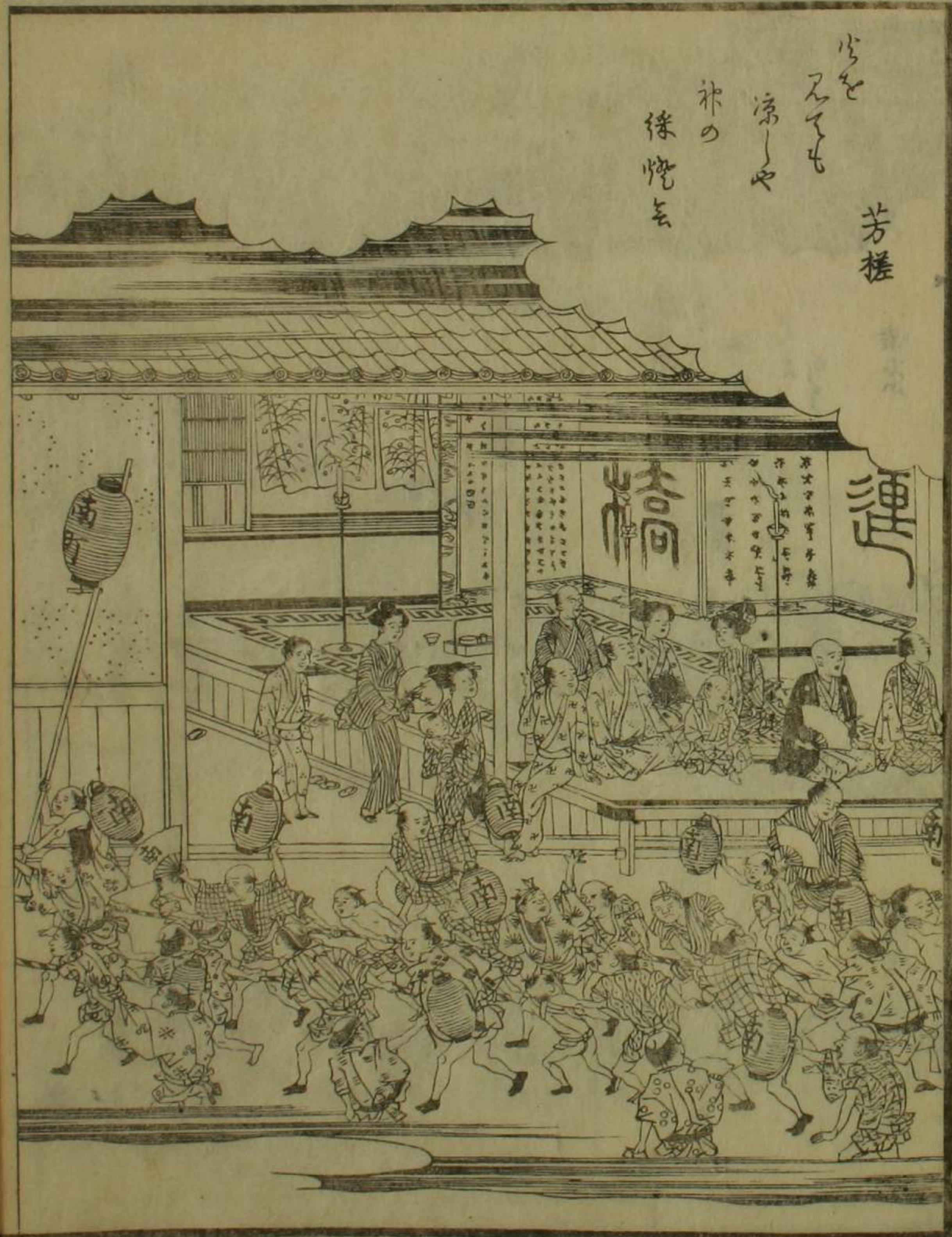
絶代は粉河の流しそちの海の海城つらきつらき 耕雲

これとも粉河の寺は秋の月てはものつらきつらき 爲村

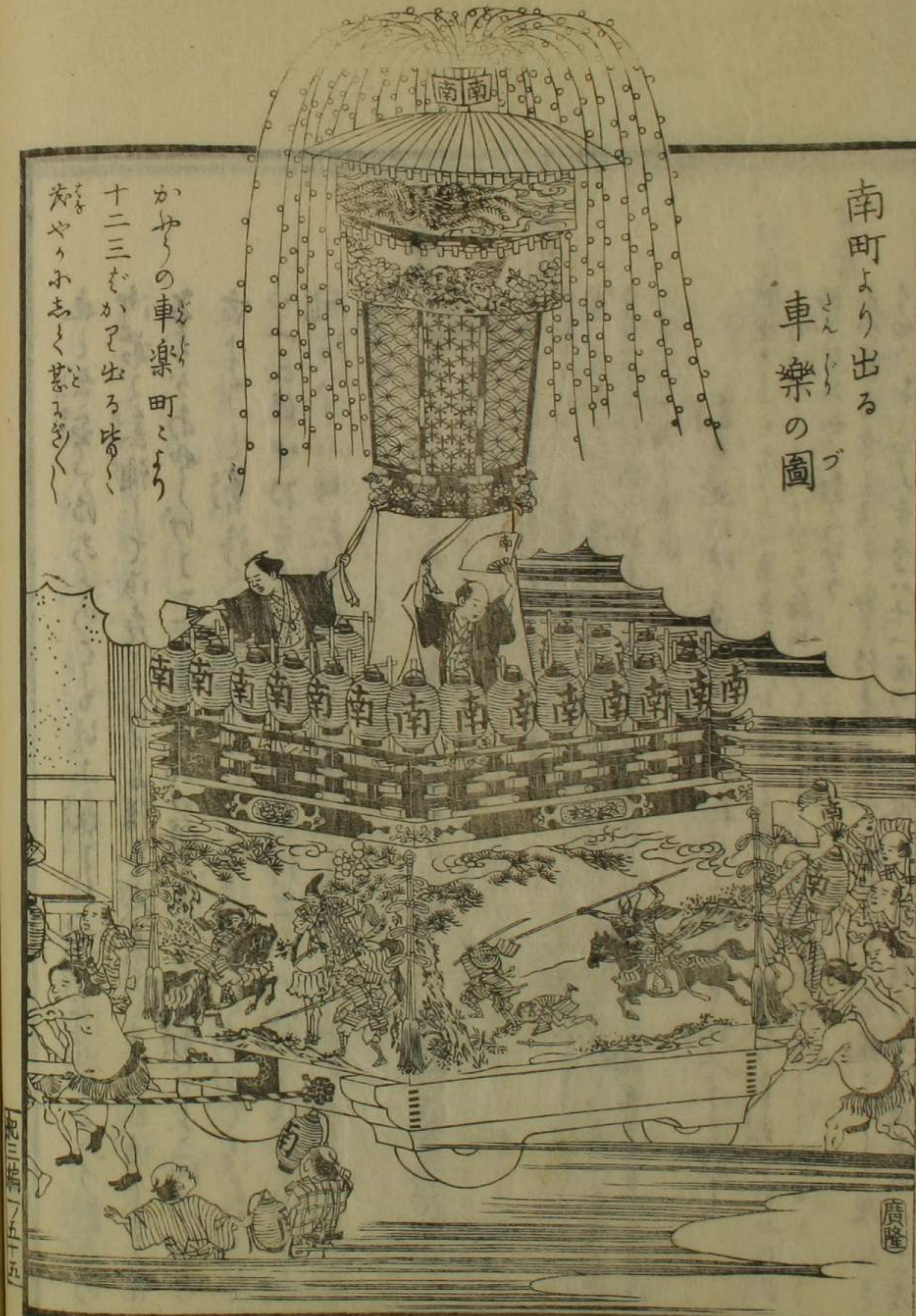
清少納言枕冊子
寺は石山粉河流賀

頼道公高野詣記

妹山姨山云其西不經幾程暫之止御船自岸邊迄寺
更龍驪令參粉河寺給先著御休幕之板屋一室便安所
御立候屋敷十宇是夜可留召御手水令參佛前給禮堂
西二間懸列御簾其内裝御座南庇鋪疊二枚爲上達部殿
上座先奉供御明五千燈御導師召僧次令行誦經于作
端施僧供米三十石次所司三綱賜祿二匹自餘各匹絹子
布等此外御願三昧堂調直僧六口同賜匹絹件三昧從成



芳様
 空を
 えても
 涼しや
 林の
 縁燈を



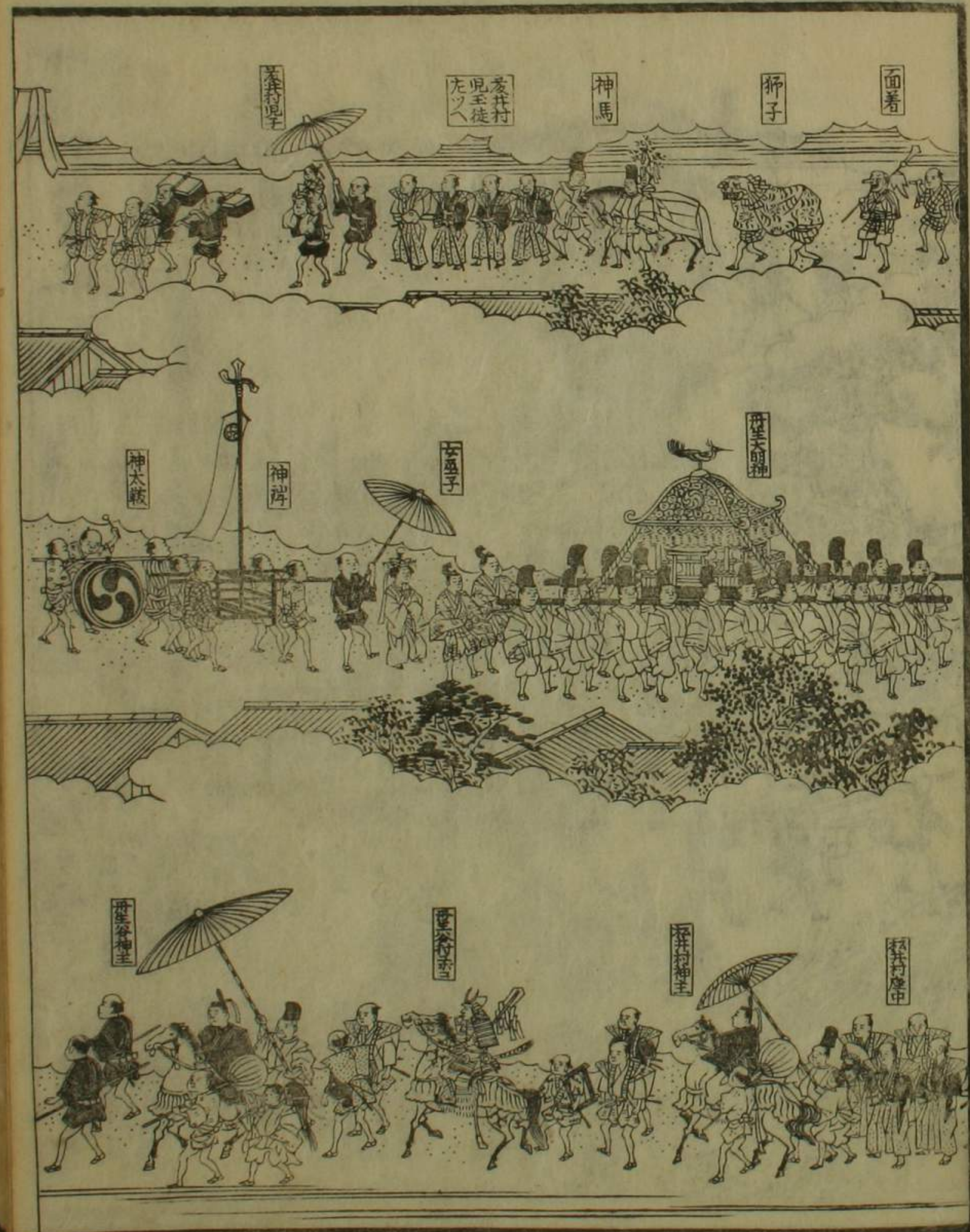
南町より出る
 車樂の圖

かやりの車樂町より
 十二三むかへ出る皆々
 大やうふあそびさるる

三十五

廣隆









権尾や

くみはらうと女の

秋ふ汗

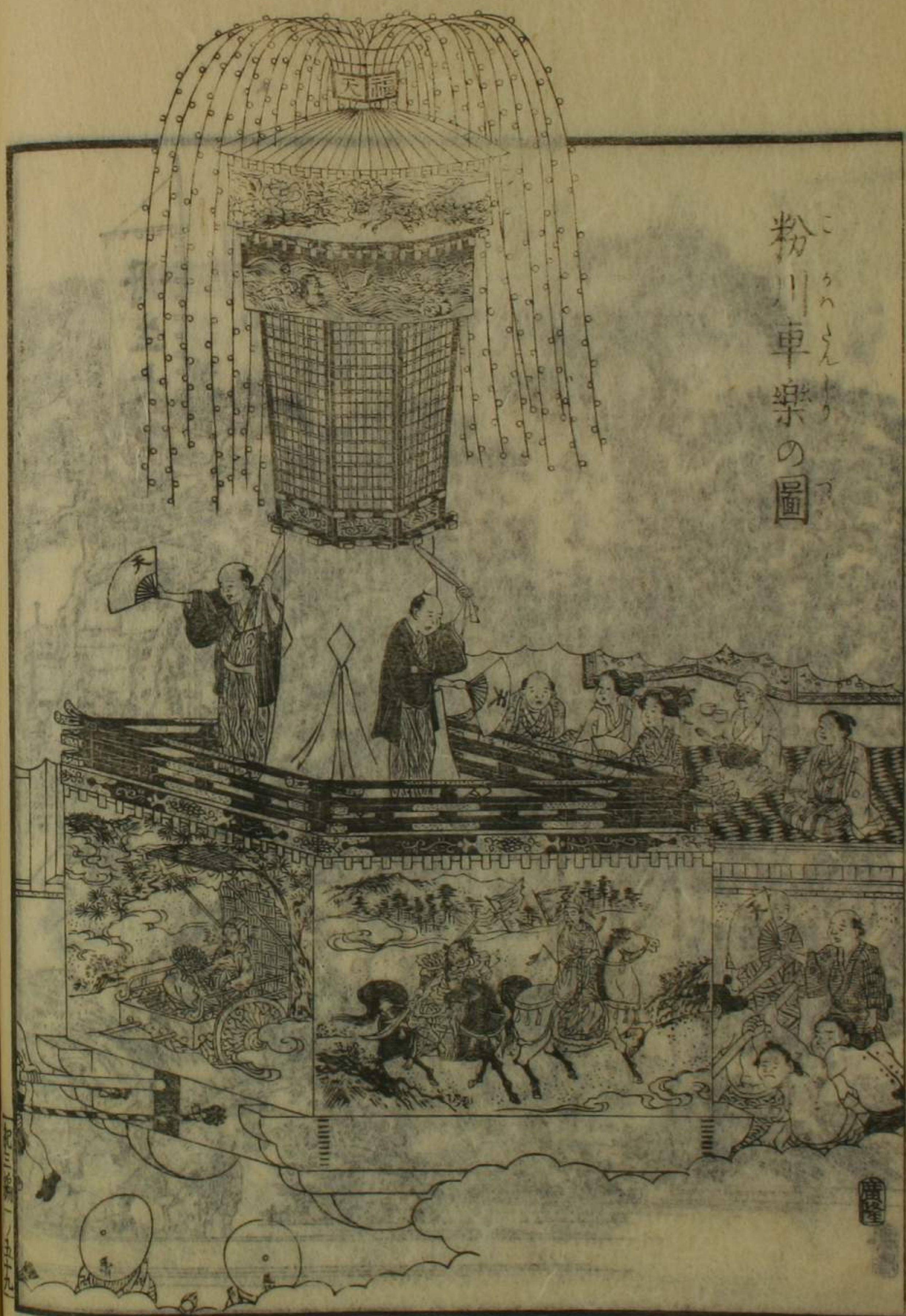
風登

すしと

こしと

洛
環
子
子
子

粉川車樂の圖



示現補陀歲轉溪山僧獨觀曉鐘音尚懸圓月一輪影
照破人間塵翳心

亞槐通躬

花をちれ山より河もゆく種れし心さういふと世のまはらば

○粉川源風狂山より出く粉河の内の流を流して大門ありて
中津川ふ合流し粉河の里中を流して此川ふ入る

八景詞云

あうつ々那を那の名所なりそよよ玉津の川出て若れし一柳の
中津の若より大門乃下し出西川と合して居坂の邊を西へ折井
子相違ふと此川の川よりのそよの親音を男の若くは一河州長者の女
子の中へいそいそと流るるをみれば此川ありてと云ふ
よつて次のとく此ま一家流ひて流るるをみれば此川ありてと云ふ
及所時し河の傍に又かたうて白粉川と云ふれりあぞ中へ川上
ハ粉河寺なりと云ふれり河よりの林のつりてそよを粉川と云ふ
粉起と云ふれり河よりのそよを粉川と云ふれり河よりのそよを粉川と云ふ
あそいゆ粉河のありて

粉川清流

翰林學士爲範

塵纓堪濯寺門前法水悠悠一川往昔清流溪白粉

佳名千歲遠相傳

黃門公福

いそいそと流るる粉川のそよをみれば此川ありてと云ふ

太上天皇一昨日サ方臨幸
吾野之間明日サ方所有
沙奈川邊也サ方奇紋
尸津津サ方水伴

十月廿九日

粉河寺坊主

白

予武直義以下凶徒造討事各云就集南に
り袖軍忠於是責と申依功と云

大層子又々々々々々々々々々

皇平年去月廿九日

在

粉河寺坊主

粉河寺に蔵之古文書頗多其令楠其一之紙示
好中老因撰下字持及阿寫之云 橋山一人

古戰場

寛正元年六月畠山尾張守政長畠山右衛門祐義統と粉河色とて戦ふ
能成統と稱し其體を著しあまて代りて我死と申村持監當云十人皆死を
我統保し免まじく國城を備川とて之を先より建徳元年小宇敷又氏保敗
軍して粉河より退く

猿園山

天照皇大神宮

鎌垣船

延喜氏部式

年料別具雜物紀伊國

鎌垣行宮跡

續日本紀云

天平神護元年冬十月甲戌進到紀伊國伊都郡十八日乙

亥到那賀郡鎌垣行宮通夜雨墮

御所芝

花山法皇白河法皇熊野御幸の時粉河寺より奉詣あり

其附の假文乃跡といひ傳ふ

祗王葬田

又野の所立おのまもあり

相傳ふ祗王を本杉河の産少く都よをてまありそ親

罪ありて囚よりぬとてて後王此地よりあり親の囚まて

牢獄の内小居さう由成立させしよりそ地を今に牢の内

といひ立すといふ又牢成立させしよりそ地を今に牢の内

ひき親ををりし所を今に舞田といひ傳ふ祗王此地より

りて子孫祗王といひ後曲よりんといふ

今も程長田中村の村にあり又中村に林氏支

龍祇王

是ハ紀州杉河の伝来といひ相もけ隣郷に林の河某といは傳ふ敵味方
いふらうといふれりお救ををりて後分捕かし生捕の人救もいふ中にいふ
若くは若城一人百捕龍舎させし所の地下人より引け書ををりて忠告
そよといふらういふありんるいふ救迎しして中界自龍舎を移しし
そやまといふや存す時の書此書を龍舎させし中界を移ししハハハハ
と後王といふ女といふいふの伝来よりんといふいふいふいふいふ
の料よりんといふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

紀三編一ノ卷三

玉垣句願宮

續日本紀云

神龜元年冬十月辛卯天皇幸紀伊國癸巳行至紀伊國那

賀郡玉垣句願宮

高野

東野村の内にて徹通二節より東ハ大和郡

湯山

杉河村の内より東ハ年中 國度

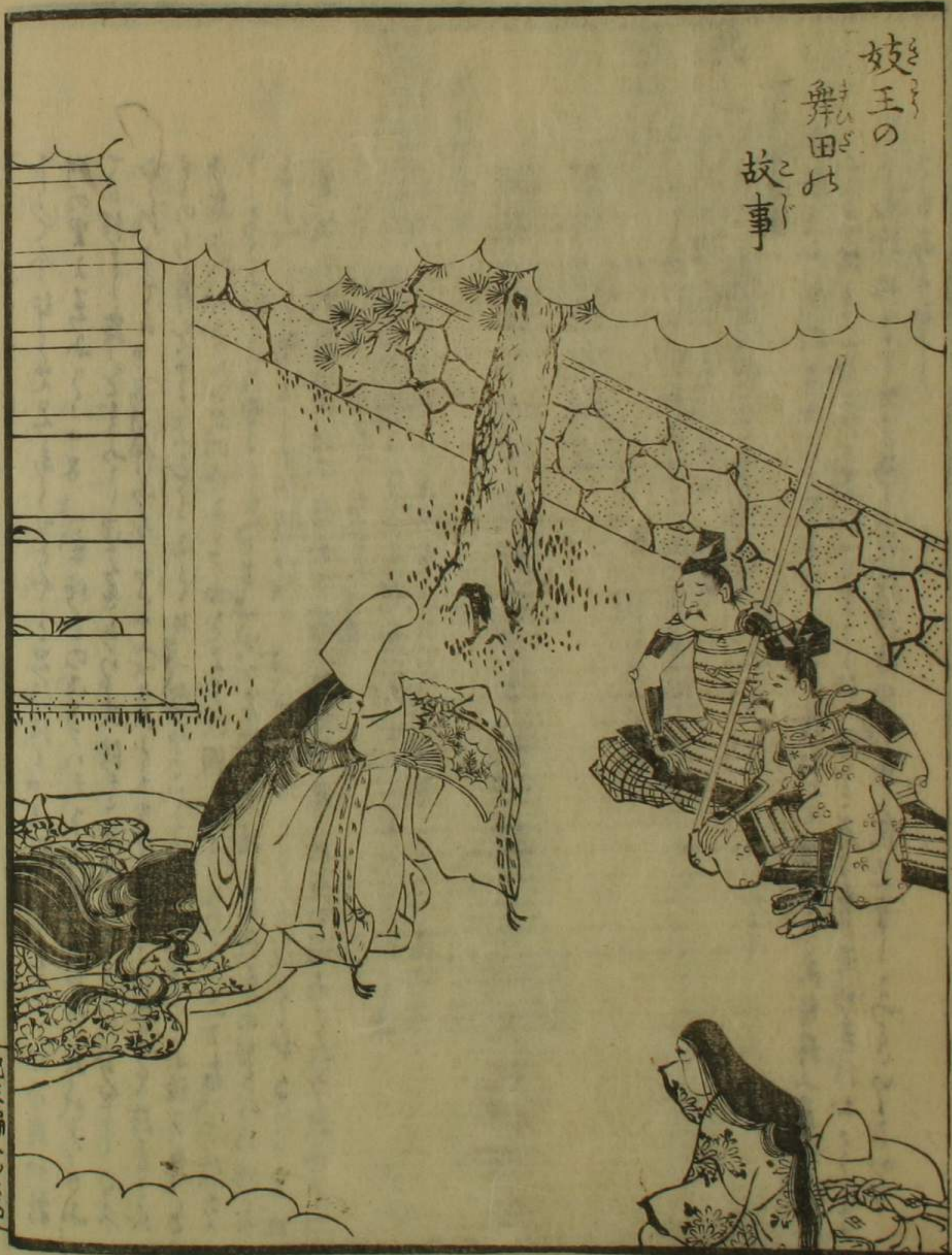
兒玉益通集

南紀公所老の後所位帝をいふらういふいふいふ湯山といふ名付所ハ益通
そ所彼よりいふらういふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
そぬ所伝すともいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
ともいふいふいふ



廣隆

舞田



妓王の
舞田の
故事



玉川舎

あり
道々
村乃
かきのせ
丸と
子むら
つら
ぬぐり

くらむ
馬車
くま
くま
くま

左りまゝ

永正十一年正月十一日 井ノ左り五郎子捕次郎丸

永正十二年正月十一日 平内太夫子乙石丸

永正十三年正月十一日

枚原子信子捕丸 井ノ夕孫を命じ入道丸

富士崎 樹道の南より

紀川は尖出く怪巖壁を以巖頭樹多く絶蓋凌霄根と結
び枝を揃て臥しのぞみ蒼翠掬とべー東南に孤島あり
長は百歩許碧岸白沙奇勝かきまわし島乃例り富士石
とて川中より特起せし奇石ありかゝら富士岳に似つる富士
峯と号し海と漲るる船紀川の長流舟中此美京時同
を記第一と云

粉河寺八景の詞

粉河寺は南二里すし紀川あり東より西ふかふ粉河枝二十里なり

三編下巻

ありと和州より出く紀城乃雅好水門とわき海よりわたりありは
く魚腹より漁翁魚存後士の梓さし船人の甚風一帆をあげく
あり漂つきて和州より船中より一方をのぞきんを南水の岩上
ら成るれませ磯頭山吹おとす紀川をわたりて細流あり乃坊
をわたり男女農夫の口とせ悲秋牧笛はまわし川面の系はる

紀川風帆

羽林中郎將實全

千頃琉璃浸大虚紀川勝狀一望初輕風吹送春帆影

花岸鷗洲畫不如

前八坐公長

乃米々海も出く船を紀の川風乃追風

木水奇勝序

巨鹿木村孝撰

窻梅送香溪鶯操音日已亭午凭几而撫吟鬚偶為睡魔所
魅歛然同諸君泛小艇在水上春一篙之所撐丹崖翠壁倏
提遠洲回首瞻望嶺頭冬雪岸上春花斯須而丹鳥至頃刻
而白雁來四時之佳景一船之壯遊或洗盞而酌或扣舷而
歌每值一勝畫人畫之詩客詩之雜以國風之詠逸興之所
發不覺叫快忽為小童所駭起俄然而覺暮鴉閃々返照紅
斂夫木水之勝海內所共知而吾紀國之人味有文之者蓋
非不能也慣見而未之奇也余也生其地亦復不得觀之
意者山川之靈其或欲便睡魔誘吾齟齬其勝歟由之觀之
辭良有以哉嗚呼夢裡之清興睡後之歌詠不可不以記焉

藤寄

兩岸排闥走滄潔
孤立芙蓉富峭絕
脚浴木川混々流
上頭半腹不留雪
魯峰山人

知まや
浪のよがぬ
空の上
法々



公

河三編ノ六十八

ゆきのね
うらたけ
まよと
又ゆきね
あふさ
あ
白浪
繪葉山人



撥其佳境三十景以爲一帖題曰木水奇勝遍請諸君詩畫之松答神靈誘我之意云其不求諸它邦而恃以吾州人士者則欲便其知南中之風流亦足以文其境也

名子川 丹生岩村西芝水を流く富士山より流れて紀川に合す

鎮西滿隆城址 丹生岩村より滿隆城址を築く人左邊門より大内後醍醐天皇に近し

本山大神宮 上丹生岩村より丹生四所明神を祀る妙河

當社ハ丹生津比賣大神赤穂山乃布乞といふ所より此地に遷幸する所里人ら社を遷す沖渡殿とせしより大神

天王宮小鎮坐し乃之る後も其神靈を崇めて奉る神

と此村の名を丹生屋といふも沖渡殿を建し板子よ

り部を承るなり其後粉河守に鎮守に勧請せしより彼

み對して本山といふ今も亦りても彼地の祭礼に神輿渡

河あり額を近衛某公の筆あり正一位勳八等丹生大明

神と書し給り

光明院 本山の良れ方山と云ふ丁許よりある寺の真波といふ寺や傳はる

至一人誕生地 西河系村が養州神の坤より一人誕生といふあり處の中は至一人及す

釋尊寺 西河系村より 本尊釋迦牟尼如来 作像あり

什物至一人真影 珠腹の古画にて一人を懸像と云ふは至一人也

馬宿村 街道のゆより最明寺附於入道馬をとりてあり村名あり

宇野若狭守城址 市場村の長山よりあり

名手新藏人城墟 同村より新藏人の高山家の墓あり

産物桃子 粉宿村よりあり

名手大明神社 定伏村よりあり

當社ハ丹生大明神八幡大神將場明神を祀りて社殿多く

建並び中央に將場明神乃執白石より紀國造補任の時宗師

よりの降詔當社に詣りて所成古例と云

穴伏川又靜川と云ふ或は志津川と云ふは源若城山と云風藏より少く伊勢於此に
穴伏川を流るる穴伏村あり此川より入るる那の隈なり穴伏村は川を堰て田
園を造るるを流るるの堰なり

古代國造讓補記

曆應三年八月廿九日爲丹生社志津川御解除經雄山川
邊著粉川宿九月一日乘燭時刻有志津川御祓新上於川
西向翼方御坐祓後流鮭内人役其後改御裝束是系解より
乃降詔の事

菅原永津故居其地伴
式もか同

三代實錄云

元慶六年十一月己巳紀伊國那賀郡人主殿權助從五位
下菅原朝臣永津男七人女七人改本居貫左京四條

紀伊國名所圖會三編卷之三終

